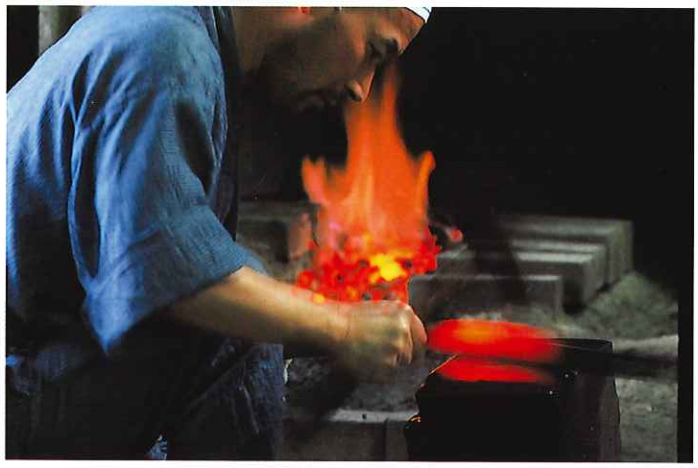
地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

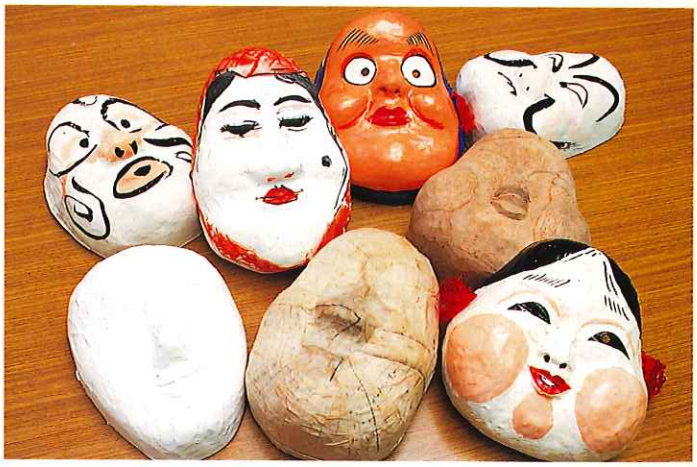
でぽら DePOLA 15

'98秋冬号

特集 先人たちの技とふる里の風土を明日へ

伝統工芸品に学ぶ





鉄の町・島根県横田町に立つモニュメント。

DePOLA No.15

[伝統工芸品に学ぶ] 特集企画に寄せて

自然の「素材」の持つ優れた神秘的な能力。それを活かし加工して、日本人はあっというような工芸品を作り上げてきた。自然と風土と作り手のハーモニーで生まれたこれらの作品は「ふるさと」の温もりにあふれている。

私達が普段の生活でしっかり使い込んでいる日用品、大切な調度品としてハレの日に用いながら、代々受け継いできた食器、その道の名人が作った趣味の品や仕事用具、素朴な風合いの着物。――これらの中には長い年月をかけて先人達が工夫に工夫を重ねて作り上げ、伝承してきた伝統工芸品が多く、生産した地域の自然風土や人々の暮らしを反映している。

もともと、身のまわりにある木や草、実などを利用して自分達の日常に使う用具として農閑期などに作られたものが多いが、その品物が社会性を持ち商品として流通する機会を持つようになると、人々はさらに厳選した素材を調達し、技を磨き、丈夫で使えば使うほど味がでるようにと心をこめて作り上げた。日本が世界に誇り、世界も注目する「職人芸」の登場である。

しかも、一つの物が出来上がるのに10数工程から30数工程に及び、その道の達人達が日夜根をつめて作っても一ヵ月以上かかるという品物もある。

これらのいわゆる伝統工芸品が、全国各地に沢山受け継がれている私たちの国に、改めて驚嘆し、先人達の凄さに敬服してしまう。

しかし、伝統工芸品というと高価な逸品というイメージが強くなり、本来の「生活の中で愛用して使い込んでほしい」という作り手達の願いが必ずしも生かされてはいない。日本人の暮らしや文化の変化、原材料の不足、職人達の高齢化と後継者不足などで、先人達が営々と受け継いできた貴重な技術がいま消えようとしているのが懸念される。

和紙、製鉄、鉱石加工（硯）など、地場産業として栄えてきた工芸品づくりの存続が危ぶまれ、一部の人々が懸命に保存・伝承の努力を続けている。

そのため国（通産省、文化庁）や県、市町村が「伝統的工芸品」に指定して継承に力を入れたり、工芸館などを設けてPRや体験教室を行なうなど、前向きで積極的な支援活動に取り組むようになってきた。

さらに最近は、「職人芸を身につけて、田舎暮らしをしたい」というUターン、Iターンの若者たちも少しづつ増えていることは実に心強い限りである。

『でぽら』15号の「伝統工芸品に学ぶ」特集では、過疎指定市町村に現存する生活工芸品、地域経済を支えてきた特産品、伝統技術の中に新しい時代の感覚やニーズを取り入れて需要の拡大をはかっている地域等を取材した。

「ガラス戸の中に大切にしまい込まないで、毎日の暮らしの中で使ってほしい」というのが取材した職人さん達の共通の思いであり、都市などに住む人々へ私達からのメッセージである。

「でぽら」編集部

長野県立上松技術専門学校で木工を学ぶ生徒たちに貸し出される大工道具。

「でぽら」とは――

Depopulated Local Authorities(人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村数は1231、全市町村の38%にも達しています。過疎地域は貴重な自然環境と農林水産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土が多数残っています。
農山村の活性化と発展をめざすため、地方と都市を結ぶ交流誌として『でぽら』をお届けいたします。回覧し、多数の方にご高覧いただければ幸いです。

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

De POLA（でぽら）

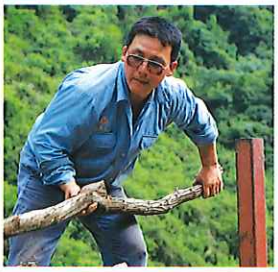
NO.15

●もくじ

[伝統工芸品に学ぶ]特集企画に寄せて(「でぽら」編集部) 2

神話が蘇る、伝統技法を守る達人のまち(島根県横田町)
[たたらの里](製鉄師・刀匠) 4
●鉄と共に六代目。伝統の美術刀剣を作る小林三兄弟●我が国最古の製鉄法“たたら”を復元・伝承する「日刀保たたら」●もう一つの顔、横田町は「雲州そろばん」のふるさと

会津の大自然と伝統の技が造る
[会津やまご桐](福島県会津坂下町) 8



身近かな草木を使って
[編組品](福島県三島町) 10

炭焼きで田舎暮らしを実現
[紀州・備長炭]物部徳明さん 12
(和歌山県大塔村)

縄文時代から今日まで続いた野性の織物
[丹後のフジ織り](京都府宮津市上世屋) 14

700余年、書家たちを魅了し続けた潤いの石
[雨畑硯](山梨県早川町・身延町) 16

天下一級の職人を育てた木材のふるさと
[木曽の木工芸品](長野県上松町) 18
●二代目桶職人、伊藤今朝雄さん●本格的木工技術が学べる長野県立上松技術専門校●上松に定住し家具造りをライフワークに、鈴木裕さん

孟宗竹全国一、竹を活かした町づくり
[竹細工工芸](鹿児島県宮之城町) 21
●「みやんじょチクリン村」活動●親子で竹工芸の名匠、鍋田さん一家●編み組みの巨匠、西園さん●竹を町づくりの活力に

伝統の技を守りつつ、新しい魅力づくりに意欲的
[佐治因州和紙](鳥取県佐治村) 24
●前田さん「尚玄」工房●自動省力化システムを導入「かみんぐさじ」岡村社長他

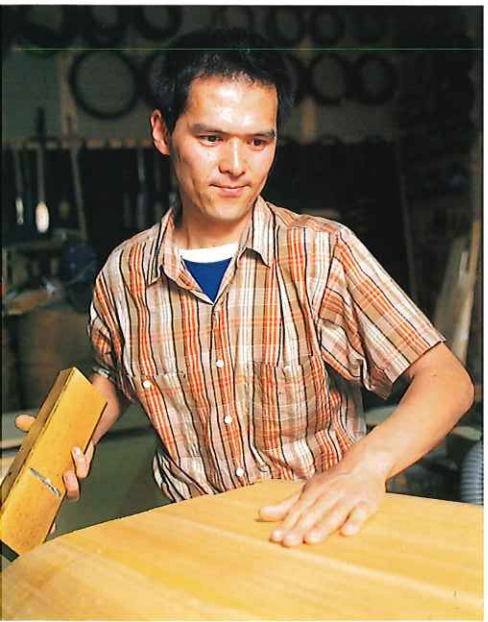
氏子達が手作りして奉納/椋神社[竜勢煙火](埼玉県吉田町)
「清内路花火」(長野県清内路村) 27

■シリーズ企画/過疎のむらから地球が見える②
自然生態系農業のまち/宮崎県綾町 28

INFORMATION 各地の伝統工芸品
●会津郷からむし織り●猫つぐら●本場大島紬●越前陶芸村●肥前焼き陶郷/波佐見 30
通商産業省指定「伝統工芸品」一覧 31

●写真/表紙①
左側・上より、木曽の木工(桶)、作刀をする小林刀匠、ヒロロ・モワダの編組品
右側・上より、会津やまご桐下駄、佐治因州和紙で作った面、雨畑硯
●写真/目次
上より、「たたらの里」村下・木原明さん、「備長炭」製炭家・物部徳明さん、家具工芸家・鈴木裕さん、竹細工匠・鍋田孝さん

▼木曽の桶職人・伊藤今朝雄さん



神話が蘇る、伝統技法を守る達人のまち

たたらの里（製鉄師・刀匠）　島根県横田町

昔はどの町や村にも鍛冶屋があり、唱歌に歌われたように「しばしも休まず槌打つ響き」が聞こえ、学校帰りの子供達が遠まきして見物していた。

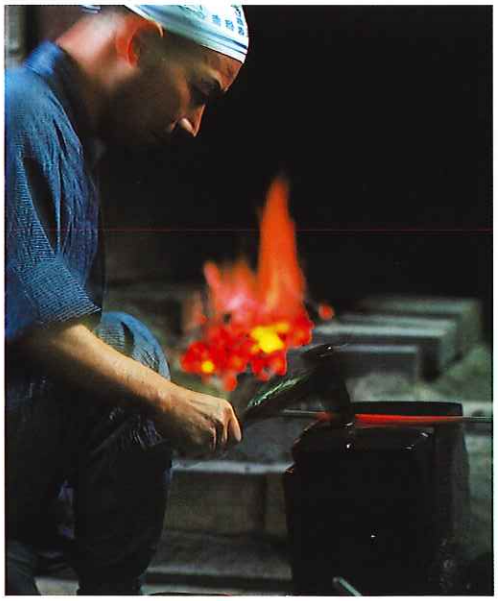
製鉄や鍛冶には鉱石、水、木炭、炎を活かしてきた人間の知恵があり、職人達の誇り、使命感といったものが感じられる。

島根県出雲地方は古来から「たたら」と呼ばれる伝統技法による製鉄が行われ、鉄を作り鍛錬する人々は畏敬を集めた。

明治に入り西洋の製鉄技術の導入でたたら製鉄は衰退し姿を消していったが、ここ横田町で昭和52年より見事に復活、国の選定保存技術となっている。

山から鉄を集める砂鉄師、砂鉄から伝統技法で玉鋼を作るたたら製鉄師、その玉鋼を使って名刀に作り上げる刀匠などが活躍する横田町。さらに江戸時代後期よりそろばん技術がもたらされ、雲州そろばんの7割を生産する町でもある。

「職人集まれ」という町の取り組みもあり、達人の技を学びたいという若者が多数来町して、新しい産物も生まれている。



作刀。鍛錬作業をする小林力男さん▶

鉄と共に六代目。伝統の美術
刀剣を作る小林三兄弟。

右／出来上った日本刀を鞘から抜いて見せてくれる小林力男さん。
左／最後にキズや焼刃の出来を確かめ、荒砥して刀姿を整える。中央が貞俊さん。右は弟子の高原さん。

ふいごで送風すると炉内の木炭が赤々と燃えだし、玉鋼（たまはがね）と混り合ってあたり一面火花が飛び散る。炉の中から約800度に焼けた鋼は取り出してさっと水で冷却させた後、「テコ台」に載せて槌で叩いて打ちのばしていく。打ちのばした玉鋼は砕き、小割りして不純物を除去し、折っては積み重ねて炉の中に入れる。これを「積み沸かし」という。

「沸く」というのは、鋼の芯まで平均して火が通ることをいい、この沸き具合が日本刀の出来具合に大きく影響するという。

延べて折って、付ける。この作業をくり返して三万二千枚以上積み重ねるそうで、長年培った刀匠の勘、体力、集中力がものをいう。「沸しが悪いと鋼に十分な粘りがなく、鍛錬性が劣り、キズが出やすいんです」

と作業を見守る次男の小林貞俊さん。鍛錬作業は、見習修業生の高原淳さんがふいごを手伝いながら三男小林力男さんが行っていた。

「折り返し鍛錬」で下鍛えを終えた鋼は、上げ鍛えという作業に入ると、やがて鋼の地肌に板目、杢目といった模様が現われてくる。

次が芯鉄、皮鉄づくり。芯鉄は柔らかく、それをU字型に包む皮鉄は堅い鋼にすることで、丈夫で切れ味が鋭く、見た目も美しい日本刀になる。

日本刀は現在注文により作刀する美術品で、鉄の最高級品・玉鋼を使い、最低でも15日間（約100時間）鍛錬しなければならないと(財)日本美術刀剣保存協会（日刀保）で定められている。「実際には一本作るのに1ヵ月以上かかる上に、焼き入れの段階で三本に一本は失敗してやり直しますし、最後に砥ぎの時（専門の砥師が行う）失敗する場合もあります。玉鋼は一本作るのに10数万はする高価なものだから一からやり直しです」

しかも危険な作業だ。顔面には何らガードをしないので、火花（最高1300度）が目に入って「目玉焼きになる」（貞俊さん）こともあるし、指を打ち砕くこともある。作業着は木綿だが、あちこちに焼け跡ができていた。

小林日本刀鍛錬場は男三兄弟、共に刀匠として活躍し、日刀保の新作名刀展等で数々の賞を受賞している。

小林家は江戸時代より製鉄業と大鍛冶屋を経営しており、三代目松左衛門の時代（幕末）には最盛期に60余人の職人を使っていたという。明治以降は洋式製鉄の普及で経営が悪化、四代目は大鍛冶職人、五代目（三兄弟の父）大四郎は満州事変に伴う日本刀の需要に応えて、作刀をはじめた。戦後はしばらく占領軍の指示で作刀が禁じられていたが、昭和27年より解禁された。

代々、たたら製鉄、鍛冶屋と鉄と共に歩んできた小林家。子供達は父親の仕事を見たり手伝い、ごく自然にこの道に入った。長男の弘嗣さん(60)と次男の貞俊さん(56)は学校を出ると京都の月山貞一師匠（人間国宝）に弟子入り。三男の力男さん(49)は2年間製薬会社に勤めたが、企業勤めに飽足らず、兄達と同様に月山師匠に弟子入りし、刀匠の道へ進んだ。研究熱心で仕事がていねい、小林家のホープである。

「三人とも性格が違うように出来た刀も違います。兄と弟は職人肌で、名刀作り一筋というタイプで、私が仕入・発注や渉外面を引き受けています」と貞俊さん。横田町の「たたらと刀剣館」で月2回、見学者用に行っている作刀実演会には貞俊さんが弟子を伴って出かけている。町の観光の目玉となり見学者が多い。

その弟子、高原淳さん(23)は小林家で「5年間修業」したので日刀保の刀匠資格試験を受けられるが、刀匠として食べていくためにはあと10年近い修業と実作が必要とか。横田町には刀鍛冶職人、砂鉄採り、「たたら」をめざす若者などが何人か働いている。

刀匠は全国に250人といわれているが、現役は100人ほどで、1年に1、2振り程度の人もいるので、専業は30人程度だという。

小林三兄弟のめざす刀は鎌倉中期の大ぶりの刀。床の間の刀掛けに飾ってあった刀剣を鞘から出して見せてもらったが、反り具合、白い肌に浮き出た波のような刃文（はもん）など、息を飲むように美しかった。

「奥出雲たたらと刀剣館」☎0854-52-2770
小林刀匠の作品を展示し、作刀実演会も開催。

▲日刀保たたら吹き作業の一コマ（提供／安来製作所）
◀村下の木原明さん、鳥上木炭銑工場前で。

我が国古来の製鉄法〝たたら〟を復元、伝承する「日刀保たたら」

小林さんら刀匠が使う鉄は、我が国古来の製鉄法である〝たたら吹き〟によって生産された和鉄。その中でも最も優れた玉鋼（たまはがね）が使用される。（鉄類には鋼、銑（ずく）、鉄があり、炭素量が多い銑は鋳物に、鉄は農具などに用いる）

玉鋼は、昭和8年から20年にかけて操業された「靖国たたら」を最後に生産されなくなり、そのため日本刀製作に支障を生じ、伝統文化財の技術保存が危ぶまれるようになった。

そこで日刀保が昭和52年に国庫補助事業として横田町にある㈱安来製作所・ワイエスエス鳥上木炭銑工場に協力を依頼して復元したのが「日刀保たたら」だった。

復元が成功したのは敗戦の日までここで「靖国たたら」が操業されていたことと、二人の「村下（むらげ）」がいたことであった。

生産設備を復元したとしても、火入れからケラ出しまでは経験とカンで行われ、約10人が従事する。「村下」とは全体を指揮する人のことで、約7日間にわたる作業を監督すると共に、火入れから送風停止までの三昼夜（70時間）は30分おきに砂鉄と本炭をくべるため、高熱の傍で炉を監視し続ける。不眠状態で重労働に耐えることが求められる。

国の選定保存技術保持者に認定されていた村下の安部、久村氏はすでに故人となり、現在は二氏から後継者として養成されてきた木原明さん（63）が新たに認定を受けて操業に当たり、後継者の育成にも取り組んでいる。操業は乾燥した一、二月に一回行われる。

町の郊外、鳥上山に向かう山林の中に安来製作所があった。工場というよりは研究所を思わせるクラシックな落着いた建物で、突然の訪問にもかかわらず木原さんは気さくに取材に応じてくれた。

木原さんは工業高校を出て同社の親会社・日立金属に就職した技術者で、日立金属安来工場（創業明治32年）で近代的な冶金技術者として働く一方で、前近代的なたたら製鉄に興味を持ち、村下に弟子入りしたという。

「昔は何十年かけて身につけたといいますが、私の場合は技術屋として製鉄の知識を持っていましたから、覚えるのが少し早かったのかもしれませんね」と淡々と語る。

ところでたたらの炉はどんなもので、どのように操業するのだろうか。

炉は深さ4mの地下構造になっていて、まず下灰といって薪を燃やし叩いてカーボンベッドを作る。炉が熱を持つと地下の湿気水気を誘い蒸気爆発を起こすことがある。消し炭の層が湿気等を吸収する乾燥剤の役目を果たしている。下灰が終わると築炉。炉は長さ2m70cm、幅95cm、高さ1m25cmの舟型で、三つの釜から構成される。使われる土の良否が操作に大きく影響するといわれる。

築炉が終ると、砂鉄・木炭が運び込まれ、いよいよ三昼夜にわたる操業がはじまる。砂鉄は約10トン、鳥取県境港市近くから採取される真砂（まさ）と呼ばれる高品質の砂鉄。木炭は12トン、800俵の炭が用意される。火入れをすると約30分おきに砂鉄と木炭を交互に炉に入れていく。村下の木原さんは高熱が吹き出すホド穴から片目をつぶって中を覗き込み、微妙な色の変化を確めていく。鉄は強い光を

刀剣館にはたたらの構造（地下4m）が原寸大の模型で展示してある。

放つので目がやられ、昔は一眼を失う村下が多かったという。

鉄は形成されるに従い、炉の壁を喰いちぎり、壁は薄くなっていく。不純物は粘土と交わってノロとなって外へ出され、融点の高い玉鋼は溶けるのが遅いので底へ溜まってケラ（鋼）となる。村下の合図で炉を崩しケラを取り出す時がきた。「70時間に及ぶ作業が終る頃になると、炉内で育ったケラの鼓動が聞こえます。炉壁を割って現われる灼熱のケラの姿は感動的です」と木原さんは語る。

取り出したケラは約3トン。その中から約1トンの玉鋼が取れ、これが全国250人の刀匠に配給されている。

横田町が一昨年開設した「刀剣館」には、実物大のたたらの炉の断面が実際の材料を使って作られており、ビデオで「日刀保たたら」の操業の様子を見ることができる。奥深い技術と鉄作りに燃える男の世界は、私たちをたたらの不思議な世界へ導いていく。

もう一つの顔、横田町は「雲州そろばん」のふるさと

▶工房でそろばんの仕上げ作業をする内田文雄理事。
▲上／作業は分業して効率化を。
下／高級家具、調度品の展示場。

横田町のもう一つの特産品はそろばん。美しい珠は金属的な音がして、指の動きを的確に捉える。我が家にも高級だからと一生懸命練習した雲州そろばんが、いまも机の中に大切にしまってある。

雲州そろばんは、江戸末期の頃に仁多町の大工、村上吉五郎が広島の塩屋小八が作ったものをこの地に伝えたのがはじまりといわれ、わらぶき農家の百年以上経た竹を使い、側面はコクタンの木。精密さが要求されるものだけに独自の工具や機器を開発して、日本を代表するそろばん産地になった。昭和60年には通産省指定の伝統工芸品となり、現在も全国の7割を生産している。

町の中心部には「そろばんと工芸の館」があり、その歴史や村上吉五郎のそろばん、昔の工具などを陳列している。一階奥には雲州そろばん協同組合の経営する工房があり、製作の様子をガラス越しに見学できる。

「職人の高齢化、需要の低下などで個々に経営していくのが厳しくなりました。そのため4年前にここに組合立の共同工場を設置し、5社（15人）で共同経営しています」と語るのは、製造担当理事の内田文雄さん。伝統工芸士の資格を持ち、自らも工場で作業に従事する。

「外国でそろばんが評価され、横田町ではタイやニュージーランドなどの青少年と交流、私も何度か指導に行っていますが、日本では電卓などの普及でそろばんのできない子供達が増えています。小学校3年で5～6時間そろばん授業があるのですが、三学期の終りの方でやるので、遅れた他の教科にまわされ、そろばんにふれる機会のない子供もいます。町長は上京した折、日本の優れた伝統であるそろばんを伝承していくよう文部省に陳情しています」

そろばんを通じて子供はたし算やかけ算の基本を頭にたたみ込み、指へ伝達して、手先の器用さも養ってきた。数学的能力の形成にそろばんは欠かせない。これが消えていったらどうなるのだろうかと危惧する。

会館には横田町の木工職人が作った高級家具なども展示してある。横田町はたたらをはじめ優れた職人達の町。まちづくり課による「職人来たれ！」の定住推進事業により、ガラス工芸家など約170名がU・Iターンしている。

文／浅井登美子　写真／小林　恵

▶横田町の新しい観光名所、奥出雲おろちループ。11の橋と3つのトンネルから成る日本最大の二重ループ（R314）。
横田町役場 ☎0854(52)2111
そろばんと工芸の館 ☎0854(52)0460

の大自然と伝統の技が造る会津やまご桐

（福島県会津坂下（ばんげ）町）

▶町内には樹齢20～30年の桐が茂っている。

品質・生産量日本一「会津桐」

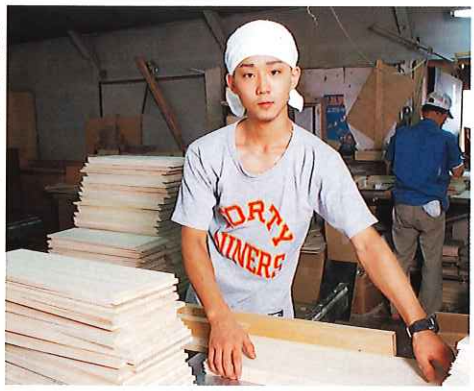
昔から女の子が生まれると桐の木を三本植え、嫁入り道具には桐の箪笥を持参するというのが会津地方の慣習だった。そのせいか会津坂下町、金山町、三島町などの奥会津地方へ行くと、桐の木が街路樹のように植えられているのをよくみかける。

桐は軽くて丈夫な上に、防湿性・防虫性に優れ、通風性もあるため、和服などの収納に適しており、桐の箪笥は最も高級な家具として親から子へ孫へと引き継がれながら愛用されてきた。

福島県は桐の生産高が全国一、その80％を会津桐が占めている。厳しい気候風土の中でゆっくり育った桐は、銀白色で木目が美しく肌ざわりがよい。割れたり歪んだりしないため品質のよい桐製品が誕生する。一般に桐の木は短命で10～15年位で伐採するが、会津桐は20年、30年かけて育成する。気候風土に適さない場所だと10数年で枯れてしまうこともあり、そのような年輪の少ない桐は水分を多く含んでいるため割れや狂いが生じやすいという。

会津桐の中でも、種から採取して栽培する「純系の会津桐」にこだわり続けている桐材会社があった。

80余年の歴史を持つ平野桐材㈱。同社は奥深い山に70町歩の桐栽培林を持ち、場合によっては50年以上かけて育てた桐を製材、加工する。桐原木の生産から加工・販売までを一環して行なっているのは全国でも平野桐材だけで、同社の桐製品は「会津やまごの桐」というブランドで、デパート等で売られている。



▶桐職人をめざして今春入社した猪又君。

▶カンナを使って何十回となく微調整する。

▶仕上げの色付けと磨きは女性達の仕事。

インテリア感覚のおしゃれ小物へ

磐越自動車道坂下で下車して車で約5分、国道49号線に面して「やまご」の桐製品展示館があった。隣接して事務所や工場があり、従業員30名が働いている。

落着いたたたずまいの「やまご」店内には芳しい匂いが満ち、銀白色系の木目が美しい桐製品がところ狭しと並んでいる。大型の桐箪笥よりも五ツ引、四ツ引、三ツ引等の小型収納箱や長手盆、花生、茶筒、菓子器などのおしゃれ小物類が目立つ。

明治45年創業、三代目平野睦雄社長は、「近頃は着物を着る人も減り、若い人はマンション住いが多くなっていますので、今までのような桐箪笥の人気はいま一つ。このあたりでも桐の箪笥より車を買ってくれという娘さんがいるようです」と語る。

そのせいか「やまご」の人気の新作品は、洋服がたっぷり収納できるインテリア感覚の箪笥、花柄の彫りや蒔絵をあしらった長手盆や収納箱など、実用性と共に趣味的な要素が

「やまご」の新作品。下は桐下駄。樹齢100年の銘木で作った下駄（上）もある。

会津

加味されている。金具も商品に合わせてシンプルになってきているように思える。

それにしても何という優しく暖かい手ざわりと木目。しかも一分の狂いもなく精密に作られているので、引き出しの開閉がスムーズで心地好く、開けるとパッと深山の森の匂いがする。

二階には、まさに家宝にふさわしい本格的な桐箪笥、テーブル等が収納され、これらの大半は注文生産によるものだという。

「桐は中国が原産地で、古来から鳳凰が宿る幸運の木といわれています。しかし桐の苗木も最近は連作栽培のために交配が進み、純系が少なくなっています。当社は純系会津桐にこだわり続け、厳選した種から育成し、間伐しながら成木を育てています。」

平野桐材の桐山は半日かけて行くような山奥にあり、現在約7万本が植林されているが、千本のうち成木として残すのは二、三本だけ。間伐したものも出来るだけ小物作りの材に使用しているという。

桐の花は抗菌性に優れ、薬用石鹸に匹敵する効果があることから、桐の花の石鹸も作られていた。アトピーなどの皮膚の弱い人に人気があるほか、虫よけにタンスへ入れておくのだという。

「不思議です、当社の工場で働いている人はみな健康で長寿、桐の木の効用でしょうか。木屑も乾燥剤や防虫剤にと欲しがる人が多いんです。」

熟練工の長時間作業で

工場へ案内してもらった。同社の製品はすべてが一枚板。製材した白い桐材は商品に応じて切断し組み立てていくが、切断面を45度にするため独得の切断機を使っている。

桐製品では金属クギは決して使わず、商品に応じて太さ、長さの異なるウヅキのクサビを手づくりし、ホウノキの木槌で打ち込む。切断、組立て等の基本作業はすべて機械化されているが、そのあとは熟練工たちがゆっくりていねいにカンナをかけていく。機密性のある桐製品が誕生するまでには、木と対話しながら長時間の作業が続くのだ。

その中に「桐の魅力に憧れて大工になった」という猪又隆君(18)がいた。今春高校を卒業、会津若松市から通勤してきている。「早くカンナを使えるようになりたい」というのが当面の夢である。

桐は柔らかいので取り扱いはもとより、刃物の手入れが特に必要だという。

出来上がった桐製品は女性達が働く工場へ運ばれ、表面に砥の粉を塗ったあと天然ロウ等で仕上げ、タオル等で何度も磨く。時代仕上げという独特のアンティックな風合いと光沢が生まれていくのである。桐と共に暮し、働いてきた地元の女性達の、「永遠に大切に使ってほしい」という気持ちがこめられているようだった。

●やまご／福島県会津坂下町気多宮
☎0242(83)1773

文／浅井登美子　写真／小林　恵

良質の会津桐の育成にも熱心に取り組む平野社長。
樹齢50年以上の桐の原木の前で。

身近な草木を使って編組品（福島県三島町）

身近にあるさまざまな草木を使って編みあげたざる、かご、バッグ、布地。雪深い奥会津の里の冬の暮らしの中から生まれた生活用具だが、その高い技術性により福島県の伝統的工芸品に指定され、福島県の顔として脚光を浴びている。

現在三島町では、会津総桐タンス、山ブドウ細工、マタタビ細工、ヒロロ細工の4種類が指定されている。先人達の技・知恵を各家が脈々と受け継いできたと共に、早い時期から町が貴重な文化財として保存と啓蒙に力を入れてきた成果といえよう。

「生活工芸館」に久保田さんを訪ねて

只見川ライン下りでも知られる三島町（人口約2700人）は、中央部を只見川が雄々と流れ、両岸に集落が点在する森と川の美しい町。小高い森の一角に立つ「生活工芸館」は、地域に残る生活工芸品や風土を伝承し、交流の場にしようと、全国に先駆けて町が昭和61年に開設したもので、〝工芸村〟活動の拠点になっている。

館内には木工、陶芸、編組品（へんそひん）づくり等の工房や研修室が配置され、町内の工人達が作った木工品や編組品、桐下駄などの一部が展示されている。

取材に伺った時期（6月）は実習教室はお休み中だったが、夏休みや、素材が出揃う秋、冬になると、都市からも大勢研修者が訪れる。

しかし二階の工房では今日も指導員の久保田節子さん(68)がやってきて、せっせと編組品づくりに励んでいた。久保田さんが手がけているのはヒロロ(ミヤマカンスゲ)とモワダ(シナノキ)の表皮を編みあげるバッグ。

編組品細工というとかごやわらじ、蓑(みの)のようなざっくりとした編み目の粗いものを想像していたが、久保田さんの編むバッグは密度が高く、まるで布地のようである。

「一日2～3㎝編むのがやっとですわ。頼まれている品物なので毎日来てマイペースでやっていますが、一個編むのに早くて半月、普通一ヵ月近くかかります」

▼ヒロロとモワダでバッグを編む久保田節子さん。

▶ヒロロを綯って縄をつくり、それをタテ糸にしてヨコ糸にモワダを編み込んでいく。
◀右は生活工芸館建物。左は只見川が流れる美しい町並み風景。

国体の時、県の特産品として出品したバッグが見学に訪れた美智子皇后陛下の目にとまり、買い求めてくれたことが久保田さんの忘れられない思い出になっている。

素材に使うヒロロは、町内各地に自生している草で、6月から7月にかけて40～50㎝のものを刈り取り、数日日当りのよい場所で干したあと風通しのよいところで陰干ししておく。この干した草を3、4本づつ束ねて縄状に綯う。久保田さんら職人の手にかかると、ヒロロはすっかり草のイメージを変え、3㎜位の丈夫で艶やかな縄糸になる。これをタテ糸にしてヨコ糸にはモワダを使い、やはり綯いながら一目一目を手で編んでいく。五、六目編んだところで、毛ムシリという工具で目をきゅっと閉めて整え、また一目づつ編み込んでいくという気の遠くなるような作業である。

「私の家ではばあさんもおっかさんもよくやってましたよ。おっかさんは、小さい私が傍にいて真似て作るのをよくほめてくれました。だから私は編むのが大好きになり、いまでも苦痛だと思ったことがない。今度はこんなデザインにしよう、こんな模様にしようと夢がふくらみ、つい夢中になってしまいます」

生活工芸館で使う草木の素材は、館の職員と久保田さん達がその折々採集に出かける。モワダの採取は深山で梅雨時に行うため、昔から男性の仕事だった。工芸館では原材料の確保をスムーズに行っていくため、ヒロロ、マタタビ、ガマを工芸館の林に移植し、育成にも力を入れている。

基本は草木を綯い上げる技術

久保田さんは、編組品づくりの基本は、まず素材として使うヒロロやワラ、モワダ等を綯う技術をマスターすることだと言う。一般に素人が使いものになる縄糸を綯い上げられるようになるには二、三日はかかるらしい。

久保田さんが、白いふっくらした手で素早く綯っていくのを見て、早速挑戦してみたが、どうしても縄状にならない。帰宅後も何度か練習したが、未だ満足いくものが出来ない。

農家などへ行くと、よくお年寄りが上手に縄を編んでいる場面に出会う。縄を編む位は簡単だと思っていたが、とんでもないことだった。農民や職人達が身につけてきた技がいかに優れたものであるかを改めて思い知らされた感じである。

三島町では他に、トチノキ等の大木を自然の風合いを生かして作った座卓や火鉢、白いきめ細かいイイズクの木を一つ一つていねいに手づくりした調理用へら、ヒロロとガマで編むかご、マタタビで編みあげた白いざる、ヤマウルシ、山ブドウの皮などで編んだかごやバッグなどがあり、その素材の豊かさと製品の素晴しさに敬服してしまう。工芸の里に魅せられて、三島町に移り住んできた木工・陶芸家達も何人かおり、工芸館の隣りには一カ月以上使う人のために貸工房「工人の館」も開設している。また研修者には、廃校を改修した宿舎「カタクリ」をはじめ、天然温泉(宮下温泉、早戸温泉)が満喫できる宿が数多くあり、観光地としても魅力たっぷりである。

●三島町生活工芸館／福島県三島町大字名入
☎0241(48)5502

山ぶどうのツル採取、小柴修一さん

アカソを採取する久保田さん

ヒロロを乾燥させたもの

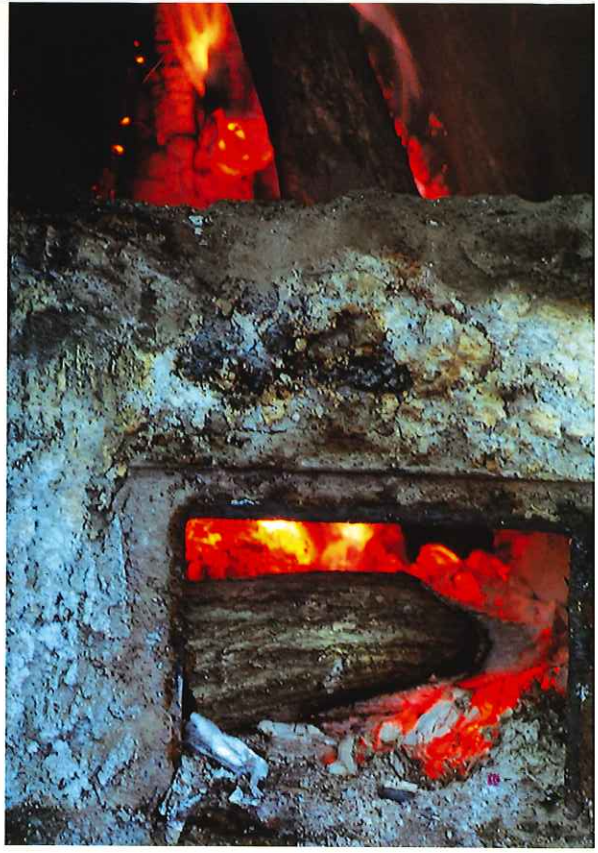
モワダの皮(シナノキ)は水に漬けて腐らせ、繊維だけを取り出す

▼「冬のものづくり教室」

暮らしを実現――物部徳明さん

紀州・備長炭（和歌山県大塔村）

▶窯の中で燃えるウバメガシ ◀薪割りはかなり重労働



一度点火すると4～5時間は安定した熱を持続し、肉や魚を独特の旨味に仕上げる山炭の最高峰、「紀州・備長炭」。近年のグルメ・自然派志向と相まって、料亭や焼肉・鰻屋などでの需要も高い。また、カルキ臭が消え美味しくなるということで、ポットや炊飯器の中に、備長炭のカケラを入れる家庭も増えている。

備長炭を叩くと硬質の金属的な澄んだ音がする。長さや太さの違う、備長炭を利用した打楽器のCDも作られている。

紀伊半島の南部、和歌山県の山中は備長炭の原木ウバメガシ（ブナ科）が自生し、備長炭の特産地として古くから炭焼きが地元の産業・経済を担ってきた。しかし、最近は炭を焼く人が少なくなり、その高齢化も進んでいる。

大塔村でも炭を焼く家の数は現在では20軒前後になり、専業で炭を焼く家の数は年とともに少なくなっている。

異色の〝転職〟製炭家

「伝統工芸品」。この言葉には長い歴史の中で脈々と継承されてきた技と共に、後継者不足や経済的に成り立たない等の理由でその存続を危ぶむ響きも現状では切り離せない。このような中で、脱サラをして敢えて備長炭を焼く物部徳明さん（37）のアプローチの仕方はかなり異色である。

6年前、東京での会社勤めの中、転職を考えてきた物部さんは、「どうせ転職するのなら、サラリーマン生活から180度違うことをやろう」と、退職前の一年をかけて、休暇を利用しながら様々な自治体などが企画する農林業の「○○体験ツアー」に積極的に参加し、そこでネットワークを作りながら、自分の描く生活設計に近い職業を探した。はじめに生活設計ありき、である。

「働きがいのある仕事を探したんですよ。絶対譲れない条件は三つでしたね。まず、経済的に成り立つこと。働いただけ収入が得られるってことも。あとは70歳、80歳まで働けることと時間が自由に使えることです。」

この条件で実際に体験したり本で調べたり、その産業に従事する人の話を聞いたりと、周到な事前準備をした。その結果、製品が天候や害虫などに左右されないもの、製品の価格が安定していること、短時間で一本立ちできることなどから、次第に選択肢が絞り込まれ、最終的に製炭業、特に備長炭にたどり着いたわけである。

物部さん32歳の大胆かつ緻密な大方向転換だった。そのためか奥さんの反対も特になかったそうだ。家族は奥さんと子供三人。

機械を導入して作業の効率を

物部さんが出身地でもない大塔村に居を定めたのは五年前。きっかけは、村が主催した「炭焼き体験」に参加したのが縁だった。

初めの1年3カ月は師匠に弟子入りし炭焼きを学んだ。その後独立し、2年間は村の窯を借りて炭を焼いた。その間に師匠の「機械を入れて作業効率を上げる」という考えを受け継ぎ、物部さんもサラリーマン時代の蓄えの中から300万円を投資し、フォークリフトやワイヤー・ロープの巻き取機などの作業機械をそろえた。

ウバメガシは、紀伊半島の山中の至る所に自生しているが、もとは薪炭用に造林されたもの。しかし、戦後は杉や檜の造林で自生地は山深い急な場所に多くなり、ウバメガシの切り出しをして運び出すまでの作業が重労働になっている。物部さんが伐採権を持つウバ

炭焼きで田舎

物部さんの焼いた高級備長炭

▲ワイヤーを張って木材を運ぶ

▲フォークリフト等を導入して作業の効率化をはかる

▲物部さんの作業場(窯)

メガシの林はそのような急峻な7町歩。

「はじめは登るのもきつかったけど、もう慣れたね。でも、30年、40年炭焼きをやっている先輩達の登る早さにはかなわない。」

最近では運び出しに山の上から木材置き場までワイヤーを張り、束ねたウバメガシや薪にする木材を巻き取機でけん引する製炭家も増えている。物部さんも約千メートルのワイヤーを渡し運び出す一人。それは山の上の物部さんと巻き取機を操作する奥さんとの共同作業となる。そのため、物部さんと奥さんは特殊な機械類の操作に必要な様々な免許を取得している。

現在の自分の窯を開いたのは2年前。物部さんの窯の特徴は、窯を二つ作ったことだ。それは将来的に生産量を上げるためだそうだ。

ここ一、二年で経済的にも安定

一回の炭焼きの期間は約10日。

「一言に10日って言っても、その時の天候や窯の調子で9日になったり、11日になったりするんですよ。まあ、そのへんは経験と勘です。」

現在の物部さんは朝6時から夕方5時まで忙しく働いている。窯入れから3、4日は3、4時間ごとに薪をくべ、その間は材木置き場で切り出した木材をトラックへ積み込む。

「窯に火を入れたら日曜も何もないよ。でも、窯出しと窯入れの間に休みを入れたり、自分で計画して休んでますよ」と満足顔。

生産した〝備長炭〟は100パーセント地元のJAが仮買い取りしてくれるので、働けば働くほど確実に収入が増えることになる。これも転職時の見込み通り。ここ一、二年でようやく経済的に自信が持てる水準（生産量）になったとか。

データ管理と後継者育成を

物部さんは将来を展望して、労力の省力化、窯焼きのデータ管理とマニュアル化、後継者育成のシステム化を考えている。

労力の省力化とは、以前よりは機械の導入が進んではいるが、人力でやっている部分に今以上に機械を入れること。データ管理とマニュアル化は、経験と勘の火加減を科学的に数値化しそれをマニュアル化することで、より安定した炭焼きを可能にする。同時にそれは、これから炭焼きを学ぼうとする人への教育過程をシステム化するための大きな資料となり得る。

上記の三点は、実は後継者を増やすための準備対策でもある。こうした準備は物部さんのように、脱サラをして炭焼きを始めようとする人にもわりとスムーズに転職を可能にすることができるかも知れない。

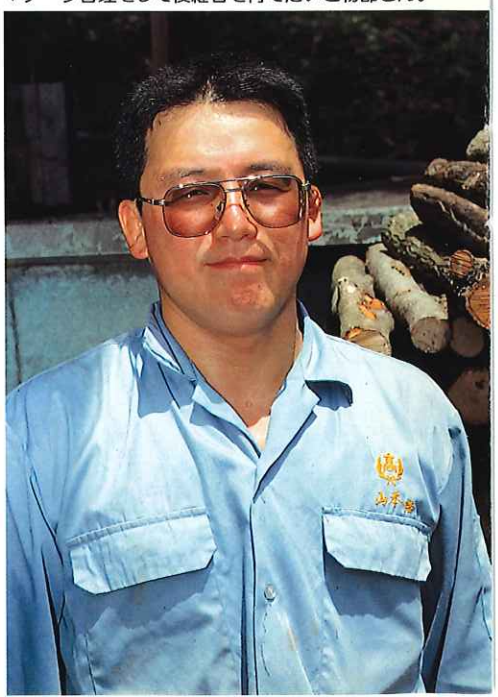
そこには備長炭を消えゆく伝統工芸の一つにするのではなく、需要に対応できる製品として残そうという意図がある。伝統をそのまま受け継ぐことも重要だが、現状を踏まえながら改良や改善の余地に新しい方法を取り入れることも必要なことだ。

「消えゆく伝統工芸品としての炭・備長炭というブランドより、安定した供給ができる最高峰の備長炭の方が絶対にいい。そのためには絶対に後継者が必要なんです」と、物部さんは目を輝かせる。

また、物部さんが転職する時に考えた選択肢と今後の課題の答えを逆にセールス・ポイントに変えて、後継者不足の解消を目指すというのも一つの方法ではないだろうか。

文・写真／武田栄一

▼データ管理をして後継者を育てたいと物部さん。



丹後のフジ織り

（京都府宮津市上世屋）

〝のの〟が織れんと嫁にも行かれんじゃった

木綿、純毛、化学繊維。今でこそ私たちの暮らしにはさまざまな繊維が溢れ、店先には多彩でカラフルな衣類が並んでいる。お金を出せば私たちはいつでもそれらを手に入れることができる。

しかし自給的な日常生活が営まれていた頃には、家族の衣類は、その原料となる繊維の調達から、糸紡ぎ、機織りまですべてが女の手仕事によるものだった。

柳田国男著「木綿以前の事」によると、江戸中期に木綿が普及する前、人々の衣類の多くは麻であったという。しかし麻の栽培には適さない山間部や、そんな土地のないところでは、山野に自生する藤、科（しな）、楮（こうぞ）などが衣類の貴重な原料となっていた。

▲丹後藤織り保存会による新作展示会（東京農工大、繊維資料館で）

京都府北部、丹後半島の宮津市上世屋、下世屋、駒倉などでは、藤のつるを使った、フジ織りが比較的最近まで行なわれていた。中でも山に入って藤を伐り、糸紡ぎ、機織りと全工程をこなしていたのが、上世屋の光野ためさん（84）だった。今ではもう高齢のため現役からは退いたが、つい数年前まで、ためさんは山に入って藤の枝を伐っていた。

春、麓の雪がやっと消える頃、ためさんは残雪の山へ入っていく。木々にからみついた藤づるを力いっぱい手元にたぐり寄せ、鎌やナタでなるたけ長く伐る。それらを輪にしてカズラで縛り、背中いっぱいに背負って山を降りる。力のいる大変な重労働だが、ためさんはフジ織りの長い工程の中でも、この作業がいちばん楽しいと言って、毎年春になるのを心待ちした。

山から伐ってきた藤づるはその日のうちに木槌でたたいて皮を剥ぎ、表皮と繊維となる中皮とに分けておかなければならない。外側の表皮が乾いてしまう前に、ここまでを一気にやってしまわないと、あとで苦労するのだ。

こうして分けられた中皮は充分に乾燥させた後、屋根裏にしまわれる。やがて上世屋の山々が新緑に染まり、田植えが始まり、季節は初夏から夏へ。そして秋になり収穫が終ると、屋根裏にしまわれていた中皮が降ろされ、「灰汁（あく）炊き」という次の作業が始まる。

水に浸して軟らかくなった中皮に囲炉裏の灰をまぶし、大きな鉄なべて炊き出していくこの作業は、中皮の不純物を取りのぞくためのものだ。そうして炊きあがった中皮の繊維は小川の冷たい水で何度も洗われ、白くなっていく。

これに糠を溶いた湯で柔軟性を与え、絞って干すと、あの荒々しかった山の藤づるが、ふっくらとした温もりのある繊維に生まれ変わる。

上世屋の集落が深い雪に閉ざされる1月、村の女たちは誰もが「藤績み」に精を出したという。繊維をつなぎ合わせ糸にしていくこ

▲藤の繊維を結び目を作ることなく長くつないで糸にしていく（藤績み）光野ためさん。

▲春早々、山へ入って藤づるを採集する光野ためさん。

縄文時代から今日まで続いた野性の織物

の作業は、根気のいる仕事で、夜なべは当たり前だった。そして機織りの始まるのが3月。昔はこの時期になると、機織りの音が村のあちこちから絶え間なく聞こえてきたという。

「のの（布）が織れんと、嫁にも行かれんじゃった」と、ためさんが言うほど、上世屋の女たちにとって、フジ織りは生きていくための生活そのものだった。大正時代には400反ものフジ布が織られたというこの村で、数年前にためさんが織ったのは、ひと冬、やっと5反であった。

学びたい、伝えたい 全国の女性たちによる保存会

東京調布市に住む石川直子さんは丹後半島の上世屋を、これまでに何回となく訪れている。初めて訪れたのは木の繊維から織物ができるという、フジ織りへの大きな興味と関心からだった。上世屋には現役でフジ布を織っている人はすでにいなかったが、京都府立丹後郷土資料館の主催で、フジ織り講習会が開かれていることを知り参加した。この講習会は1泊2日で年に8回行なわれる。春の山での藤伐りから、小川での藤こき、糸にする藤績み、そして機織りまで、季節を追って上世屋の暮らしの中で、フジ織りのさまざまな工程を体験する。

「知識だけでこのフジ織りの技術を学ぶのではなく、背景にある暮らしや、環境や、季節のリズムのようなものを感じながら、暮らしの一部としてのフジ織りを体験してほしいと考えているんです」

と丹後郷土資料館の井之本泰課長は話す。

今年で14年目を迎える講習会には女性を中心に全国から受講者がやってくる。その講習会を修了した有志たちによって、'89年には丹後藤織り保存会が発足した。現在の会員は120名。石川直子さんもその会員の一人だ。

保存会ではフジ織りの伝統技術を絶やさずに伝えていこうと、さまざまな活動を行なっている。その活動の一つが今年6月、東京農工大繊維博物館で行なわれた「丹後の藤織り展」だ。

展覧会では光野ためさんの織った仕事着の他、保存会のメンバーによるフジ織りの新しい試みが数点展示されている。繊維博物館教官であり学芸員の並木覚さんは、

「昔は野良着であり山仕事着だったのでしょう。今回保存会の皆さんは伝統的なフジ織りの技法を大切にしながら、紗（しゃ）、波織りなど高度な技術にも挑戦し、行灯（あんどん）、屏風（びょうぶ）、ハンドバッグなどへと世界を広げています」と話す。

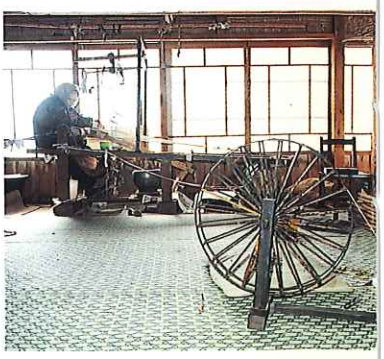
縄文後期に生まれたといわれるこのフジ織りを、一人でも多くの人に知ってもらい理解してもらうことが大切と、保存会の人たちは考える。光野ためさんと10年間じっくりつき合ってきた丹後郷土資料館の井之本さんは、

「貴重な伝統工芸品などと言って、恭しくガラスケースなどに閉じ込めてしまわずに、フジ織りの実用品としての力強さを知ってほしいというのが私の本音です。いずれは誰でも使えるものとして市場に出ていってほしいですね。こういうものは暮らしの中で使っていかないと、きっと消えてしまいます」と言う。

上世屋の暮らしをつぶさに見てきた人ならではの熱い言葉だ。

▲河原に入って藤こきをする丹後藤織り保存会の人々。

▲1反織るのに2～3日以上かかる。出来上ったのの（藤布）。



◀枠取り、よりかけのあと、やっと機織りに入る。タテ糸は糊をつけて乾かし、ヨコ糸は糸車で竹管に巻き、水に浸して杼におさめて織っていく。

●丹後藤織り保存会／京都府宮津市国分
府立丹後郷土資料館内 ☎0772(27)0230

文／金山淑子　写真／府立丹後郷土資料館・小林　恵

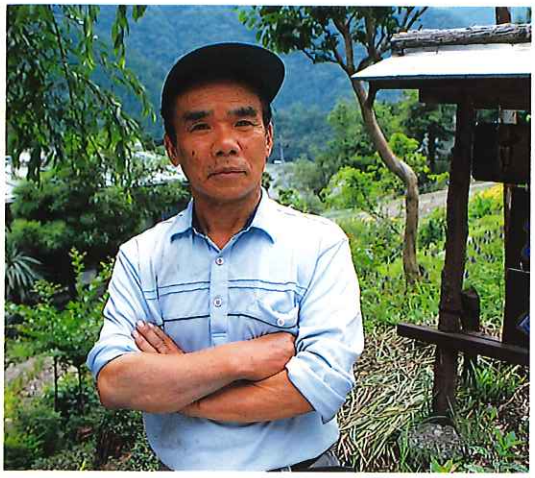
魅了し続けた潤いの石

雨畑硯（あまはたすずり）（山梨県 早川町・身延町）

雨畑地区ではただ一人の硯職人
望月知石さん

パソコン、ワープロの時代である。鉛筆すらも持たない人が増えているこの時代にあって、硯の需要は減るばかりだ。しかしそんな中で、書の美しさが見直され、カルチャーセンターなどで新たに筆を持つ人たちが増えてきたという動きも、一方である。

硯職人望月知石さん(67)はそんな世間の動向などには全く無関心といった風情で、小さな作業場で淡々と硯を掘っていた。今では望月さんがただ一人の現役硯職人となった早川町雨畑。山梨県の南西部、南アルプスに囲まれたこの地域は地形地質が複雑で、昔から硯に最適な粘板岩が付近の山域や早川支流の川底から産出された。



雨畑石と呼ばれるその原石は薄紙を重ねたような層を幾重にもつくり、水分を吸収しにくい、墨おり、発墨が良いなど、硯石としての条件を完璧に備えていた。書家などの専門家の間では「雨畑石は墨をよく噛む」といわれ、中国の端渓硯に並ぶものとして古くから珍重されてきたという。

望月さんの仕事場は国道から早川とその支流に沿って10㎞余り走った辺り、雨畑湖の西に小さく拓けた集落の一角にあった。最盛期には雨畑地区に20戸あった硯職人の家も、今では望月さん一人がこの雨畑で伝統産業を引き継いでいる。

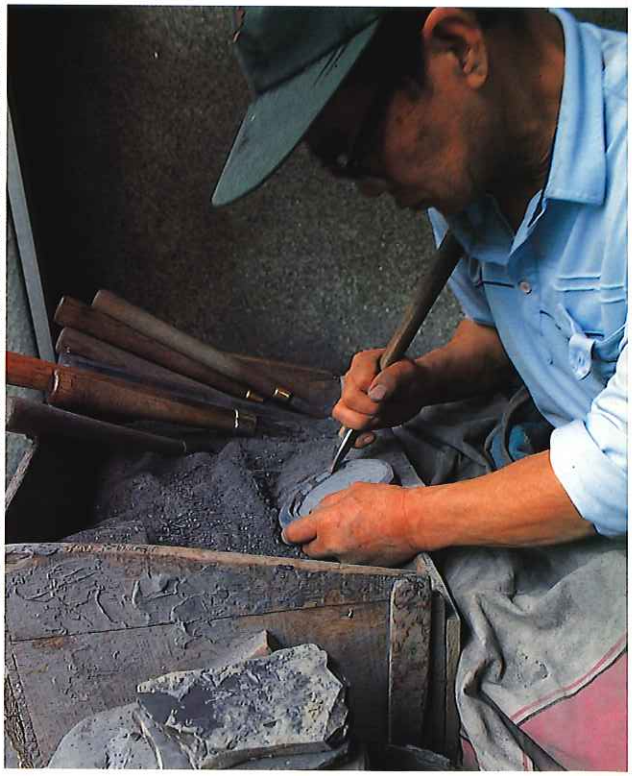
満開の山百合やダリアが咲き溢れる畑の奥の仕事場で、望月さんは鑿（のみ）を使って硯を削っていた。手元には数本の鑿が並び、すぐ隣りには磨き用の水の入った桶と、いくつかの砥石があるのみ。選定された原石が雑然と重ねられ、表情豊かな漆黒の硯が産み出されるその仕事場は、至って簡素でシンプルそのものだ。機械などを一切使わない本物の手仕事の自信が無言のうちに感じられる。

「この海と地の堺がね、神経を使うところですね」と望月さんがボソッという。墨を摺（す）る平面が〝地〟で、墨の溜る凹んだ部分が〝海〟。この堺を滑らかに程良い角度にすることが腕の見せどころだという。

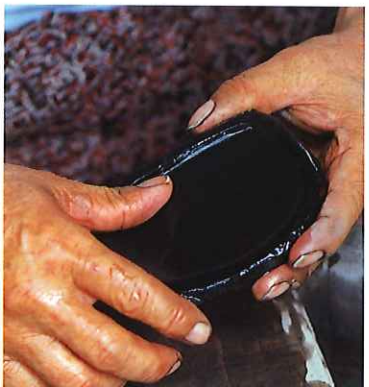
シャツのボタンをひとつはずし、誇らし気に見せてくれた胸元には、くっきりと色の変わった鑿ダコができていた。一代目の父親から初めて鑿を渡されたのが15の時。以来その胸元で鑿を支えて硯を削り、いつの間にか50年の歳月が流れていた。

「雨畑では私一人になってしまいましたけど、同じ早川町にこの雨畑石を使っている若手の後継者が一人だけいます。何とかもっと硯職人が育ってくれればと思うんですがね」

子供のいない望月さんが将来への思いを託せるのは、今のところ、この若手一人だ。雨畑硯は隣の鰍沢でも作られていて、現在15業者が伝統産業を支えているが、原石が不足していて雨畑石はなかなか使えない。貴重な原石をどう活かしていくか。沢山の課題を抱えながら伝統の硯が今日も作られている。



作業する望月知石さん。鑿を持つ手が正確にリズミカルに動いていく。削った後は砥石で磨き、漆の粉をといた液を塗って仕上げる。



円形状のフォルムが美しい富士川クラフトパーク内の「ふるさと工芸館」。和紙、陶芸、ガラス、木工等の工房で実演の見学や体験ができる。

700余年、書家たちを

雨畑硯の新たな可能性に挑む

望月定徳さん（富士川ふるさと工芸館）

ここ「富士川ふるさと工芸館」がオープンしたのは平成元年5月。富士川流域の山合いに広がる53haの都市公園「富士川クラフトパーク」の一部に建てられた。

山梨県の西八代郡と南巨摩郡の2郡（11町）で構成される富士川流域の地場産業を、内外に広くアピールしようと、県と11の町とが第三セクターで運営。伝統工芸の和紙や陶芸の体験コーナー、曲げわっぱや木工細工の実演や展示販売のコーナーが設けられ、話題を呼んでいる。

その実演コーナーの一角に、山梨県を代表する伝統工芸である雨畑硯のコーナーも設けられていて、そこで硯を製作しているのが望月定徳さん(41)だ。号名は玉泉。雨畑の望月知石さんとは同姓だが血縁ではない。

望月さんは硯職人だった父親のもとで20歳から修行し硯職人となったが、経済的に成りたちにくかった時期があり、硯作りを一時中断した。その後この「富士川ふるさと工芸館」から、出店の誘いがあり、硯製作を再開したという。

昨年度の入館者数が約12万人というから、望月さんの仕事場は、沢山の人々との触れあいがあり、硯作りの課程を多くの人に知ってもらう絶好の場でもある。

ここで望月さんは選別した原石の荒削りから、彫り、研ぎ、漆を塗った仕上げまで、硯作りのほぼ全工程を実演しながら進めていく。

一部の専門家の間では中国の銘硯端渓になぞらえて〝和端渓〟などと呼ばれ、高い評価を得ている雨畑硯だが、望月さんはもっともっと広く一般の人々にも、この硯の素晴しさを知ってほしいという。コンピューター全盛の時代だからこそ、墨を摺り筆を持つような時間が暮らしの中にあってもいいのではないかと考える。

望月さんの作品が並ぶショーケースには硯の他にも、雨畑石を使ったループタイやブローチが揃い、人目をひいている。

「可能な限り新しいことにチャレンジしてみようと思っているんです。雨畑石の美しさを活かしたこうしたブローチなどもそうですが、魚や亀、カエル、なすなどをモチーフにした硯も作ってみたいんですよね」

と熱っぽく語る望月さんからは、雨畑石の後継者としての使命感のようなものが感じられる。

県と町とでお膳立てしてくれたこうした場をフルに活用して、人々に広くアピールし、雨畑硯の需要を拡大することが、この伝統の地場産業を守り、より沢山の後継者を育てていくことにつながるのだと、望月さんは確信している。

●富士川ふるさと工芸館／山梨県身延町
☎0556(22)1875

文／金山淑子　写真／小林　恵

伝統的な手法の中に新しさが感じられる望月玉泉さんの作品。

育てた木材のふるさと

木工芸品（長野県上松町）

「桶屋」と筆書きされた障子張りの入口。池波正太郎の小説に出てくるような小粋な佇まいだ。引き戸を開けて中に入ると全身ヒノキの香りに包まれる。手桶、風呂桶、おひつ、飯台。サワラやヒノキの品々が所狭しと並んでいる。

「どうも」と言って奥から出てきたのは、これ又絵に書いたようないなせなオ兄サン。桶職人「桶数」の伊藤今朝雄さん（42）だ。殆んどが注文で作っているという伊藤さんの仕事は、どれを見ても息をのむほど美しい。サワラやヒノキの板を張り合わせて、タガで止める桶づくりは、一分の狂いも許されない高度な技術が要求される。

ナタで弓形に割った木を天日に一年晒して干した後、「ショウジキ」という作業をする。鉋（かんな）がけをして合わせ面をピッタリあわせるのだ。そこに仮りのタガをかけ、仕上げの鉋がけ、本タガと繰り返し、底入れをして完成となる。

「今じゃ乾燥機で乾かす職人が多いけど、天日で乾燥したものは木のアクが取れて、ご飯や漬物が苦くならないんだよね」

と伊藤さん。難しい桶づくりの中でも特に神経を使うのが味噌桶だという。ネズコという木で作る味噌桶は、水は漏らなくできても塩水は染みてしまう。その塩水よりもっと染みるのが味噌なのだ。しかしそこは木の性格や生命力を知りつくしている伊藤さんだ。

「こうやって内側には目のつんだ冬目を活かして使ってね。夏目の部分を使う時は塩分が出てしまわないように木を横にして使うんですよ」と教えてくれる。冬に育った冬目は成長が遅い分だけ、木の密度が濃いのだ。

伊藤さんが使っている道具は桶職人だった父親の故伊藤数馬さんから譲り受けたものが多い。

親父さんから受け継いだ鉋（かんな）が100丁

木曽の二代目桶職人・伊藤今朝雄さん

「オヤジが使ってた鉋だけでも100丁はあるんじゃないかなぁ」と話す伊藤さんの傍で、母の静枝さんが「着るものも買わないで鉋ばかり買ってたからねぇ」と笑う。その数馬さんは83歳で亡くなるまで鉋を離さなかった現役の職人だった。平成3年度には現代の名工全国百人の一人に選ばれ、労働大臣賞も受賞している。

そんな父を持つ伊藤さんだ。「恥ずかしい仕事はできないよね」と見事に仕上った桶を見つめながらきっぱりと言った。

仕上げの鉋がけをする伊藤さん。コウヤマキ材の風呂釜は水に強く、優しい水をつくる。ヒノキに優るとも劣らない名木で、乳ガンの痛みがとれたという声もある。
「桶数」☎0264-52-2204

天下一級の職人を
木曽の

上松技術専門校。広々とした近代的校舎で、裏側には寄宿舎もある。

本格的な木工技術が学べます
長野県立上松技術専門校

同じ上松町に木工技術を教える専門校があると聞いて訪ねてみた。外観の柱や玄関に、地元のヒノキをシンボリックに使った明かるい校舎が建っていた。

県が運営するこの施設では現在57名の学生が学んでいる。大半が県外からだ。科目は家具製作を学ぶ木工科、建築に関する基礎とインテリアを学ぶインテリアサービス科、木彫・ろくろなどによる木工加工品の技術を学ぶ木材工芸科、そして学生の能力と適性に応じた訓練内容を行う総合専修科の4科からなっている。

▲木工科ではムクの木を使って実習。手前2人の女性は大学を卒業して今春入学した。
▼定年後木工を学ぶ中高年の男性の姿も。みな熱心そのもの。

訓練期間はいずれの科も1年で、入学金・授業料は全て無料。訓練終了後には2級技能検定試験の受験資格が得られるなど、いくつかの特典もあり、学生には好評だ。

体育館のような広い実習棟の一室では、生徒たちがいくつかのグループに分かれて、ろくろを回したり、タンスの引き出し部分に鉋(かんな)を当てたりと、思い思いの作業をしていた。所々に置かれた道具箱には、10数種類の鑿(のみ)と鉋、金槌、墨をつける毛引きなど。これは学校から生徒一人ひとりに貸与されたものだ。

木工科で最初に習うのは鉋研ぎ。これを3週間続けて、道具の使い方が分かってきた頃に初めて釘を使わずに枡を作る。その次には額縁だ。これらの一連は組み手という技術を修得するためのもので、こうした基礎技術の修得の後に機械加工の段階へと進む。

◀コンピュータによる立体裁断ができる最新機器の前で、桐原校長。

生徒たちのさまざまな作業を見ていくうちに、合板やベニアが全く使われていないことに気付いた。そのことを教官に訪ねてみると「他校では殆どがベニアのフラッシュを使っていますが、ウチの学校では全てムクの木材を使っています。本物の木を本物に加工することを教えたいと思っていますから」という答えが返ってきた。

さすがは古い歴史をもつ木曽木材のふるさと。江戸時代から尾張藩の厳格な保護のもとに守られてきた木曽の美林は、この地の林業と木材産業の原点であり、人々の心を支えてきた大きな誇りでもあることだろう。木工の初歩の段階から贅沢にムクを使わせてもらえるこの学校の生徒たちは、何と恵まれていることだろうか。さらに同校では、コンピュータで立体裁断できる機器など、最新の設備も揃っている。

校長室で桐原和男校長に話を訊いた。

「定員30名の木工科の生徒のうち17名が大卒です。中には芸大、東大、阪大卒などという

生徒や、感覚的に凄いものをもった生徒なども沢山いて、それは楽しみですよ」

そう話す桐原校長の後に、卒業生らの作品が並んでいる。鏡台、チェスト、テーブル、入れ庫の鉢など、どれもがデザイン的にも技術的にも完成度の高いものばかりだ。年に一度のバザーではこれらの作品がほとんど材料費程度の価格で、地元の人に提供される。作品は飛ぶように売れていくという。

中卒で入学してきた15歳の生徒から60歳の生徒まで、幅広い世代が同じ目的をもって仲良く学んでいる。卒業後もこの町に残る生徒が多いと聞いた。木曽駒ケ岳の大きな山容を眺めていたら、そんな気持が分かるような気がした。

●上松技術専門校　☎0264(52)3330

上松に定住・家具作りをライフワークに選んだ

上松技術専門校卒業生　鈴木　裕さん（木工房「おとぎ」）

鈴木裕さんと三男の航（わたる）君、洋子さん。後の家も手作り。木工房「おとぎ」☎0264(52)2907

鈴木裕さん（40）の仕事場は木曽川の流れに沿ったのどかな山里の一角。山から伐り出して7年目という大きなナラ材のぶ厚い板が、入口付近に幾重にも積み上げられている。

「いやぁ、何を作ろうかとずっと考えているんですけどね。勿体なくて使えないんですよ。あんまりいい木なんで」

穏やかな笑顔でそう言いながら、鈴木さんはうれしそうにナラの板をゆっくりと撫でる。

鈴木さんは上松技術専門校を11年前に卒業したOBだ。出身は八丈島。東京でコンピュータのシステム開発の仕事をしていた時、出張で長野にやってきてこの学校のことを知った。木工が好きだったこともあって大いに心を動かされたという。

妻の洋子さんも東京で子供服のデザインの仕事をしていた。二人は東京の暮らしを整理して、揃って上松技術専門校に入学した。机を並べて1年間ともに学んだ。（当時、学校には女性用の寄宿舎がなかったので、二人で民家を借りて住み、隣の空きスペースを仕事場にした。）

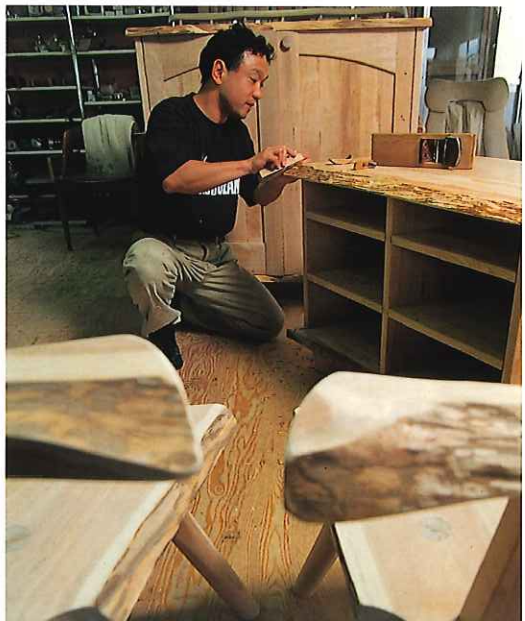
1年で学校が終了した後も、二人は迷うことなくこの地で家具づくりを続けていこうと決めていた。家具の注文が少しづつ入るようになったからだ。さらに「全国工房クラフト展」への出展などがキッカケとなって、横浜高島屋、東京・日本橋高島屋などでの展示会も実現した。

取材に伺った日、鈴木さんが仕事場で取り組んでいたのはナラ材のキャビネット。東京国立に住むピアニストの顧客からの注文で、楽譜のサイズに合わせた独創的なものだ。キャビネットトップの表面にそのまま活かしたナラの木肌が美しい。

仕事場の隣には、鈴木さんが一人で3年かかって建てたというヨーロッパの田舎風のしゃれた家が建っている。家具はもちろんすべて自作。三人の子供達には手製の木馬も。何とも頼もしいお父さんだ。奥さんの洋子さんは今では育児に専念しているが、鈴木さんの仕事には欠かせないアドバイザーなのだという。この暮らしから、木曽の仕事場から、次にはどんな楽しい家具が生まれるのだろう。木曽木工の伝統は時代の新しい空気を吸って、この地に逞しく息づいていた。

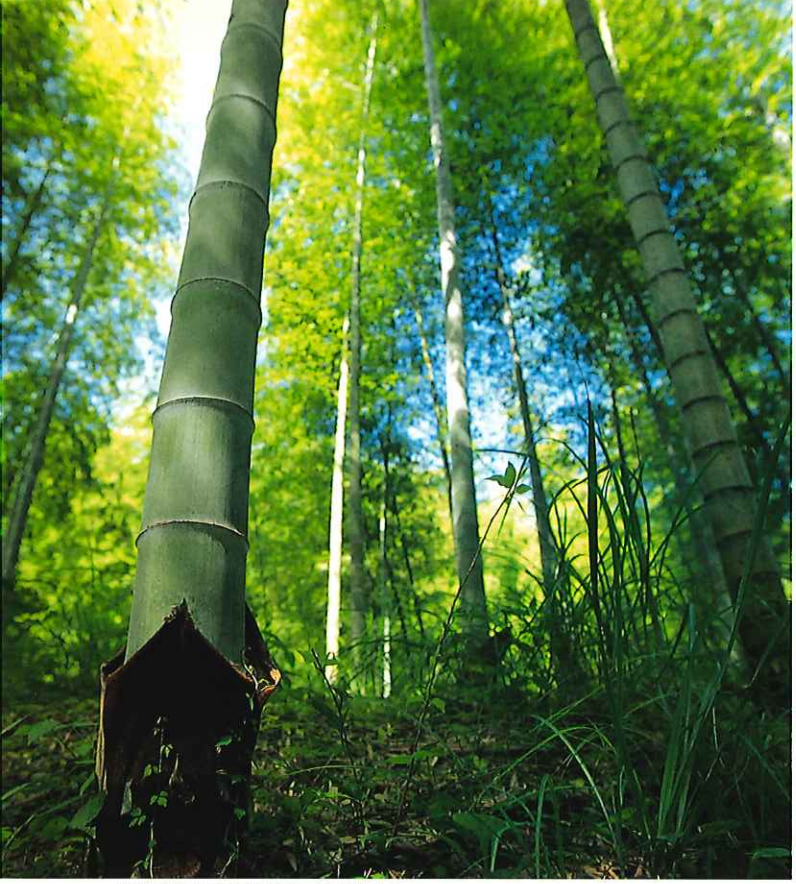
文／金山淑子　写真／小林　恵

木肌のぬくもりにあふれる家具。



孟宗竹全国一、竹を活かした町づくり

竹細工工芸（鹿児島県宮之城町）



町内の竹林（孟宗竹）は元気がいい。

「みやんじょチクリン村」活動で竹の町宮之城をPR

「竹林で生まれた、そよ風は、ふるさとの暮らしを編みながら、私たちのもとへ浪漫を運んできます」と、鹿児島県宮之城町の竹製品のカタログは始まる。町を囲む里山の裾野いたるところに竹林が広がり、孟宗竹の竹林面積は468ヘクタール、市町村では全国一の広さだ。その豊富な材料を活かした町づくりの原動力となっているのが、昭和58年11月に開村したミニ独立国「みやんじょチクリン村」である。

地元商工会の青年部が、夏祭りを盛り上げようと特産品の竹で「竹みこし」を作り、「ミスかぐや姫」を募集。地元でも竹の魅力に気付いてなかったのが、竹取り物語をパロディ化したことで、マスコミの話題となった。鹿児島県内はもちろん、全国に「竹の町宮之城町」が知られることとなった。

その勢いをかって、町おこしを目的とした活動にしようと開村したのが「みやんじょチクリン村」である。門松普及キャンペーン、全国物産展への出品、お月見コンサートなどの活動を行なっている。現在の村民は57人、翁・嫗村民が29人のミニ独立国ではあるが、町の活性剤としてなくてはならない存在だ。

竹の町宮之城町を広報するのが、「みやんじょチクリン村」であるならば、それを支えているのが伝統工芸の竹細工である。特に孟宗竹を材料に造る花器は、全国の70％が宮之城町で生産されている。

親子、竹工芸の名匠 鍋田さん一家

「素材が加工の原点ですから、竹を見る目がなければ作れません。竹の良し悪しは、見ただけで分かります。こん竹は、硬かぞとか、下の方だけ見ても、頭が折れていたなとか分ります。」

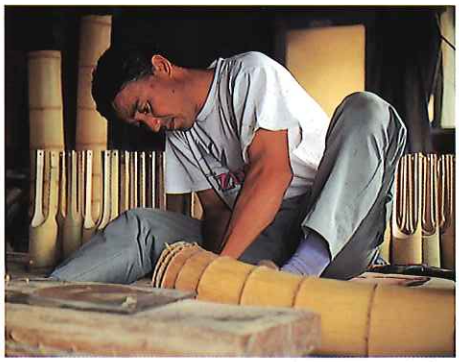
鍋田孝さん（41）は、伝統工芸士の中で最も若手である。「照玄」という雅号を持つ一級竹工芸技能士だ。高校を卒業して5年間は、関東で事務機のセールスをしていた。しかし、自分の時間がまったくない営業の仕事に嫌気がさして、18年前にUターンして家業を継いだ。

父の鍋田高義さん（72）が、昭和30年頃から現在の花器製造を始め、これまでに注文をもらった華道の先生たちは、北海道を除いて全国に及んでいる。

そうはいっても、花器は問屋の注文に応じて生産する下請だ。銘を入れて花器作家として売れば価格は上がるだろうが、そんな冒険はしたくないと、二代目の孝さんも言う。

私が鍋田さん親子を訪ねた時、「湯抜き」の

花器製品を作る鍋田さん一家。



竹の「湯抜き」作業をする鍋田さん親子と孝さん(下)

作業をしていた。家庭の風呂桶より少し大きめの釜にたっぷりの湯を沸騰させ、カセイソーダを加えて温度を上げる。その湯に5、6分間材料の孟宗竹を漬けた後、磨き粉をつけてタワシで竹の表面を擦り、20日間程陰干しをする。

こうすることによって、竹の油分が抜け、製品になってからカビが出たり、変色したり、ひびが入ったりするのを防ぐのである。

「竹は、水分の少ない旧暦の彼岸過ぎから1月末までに掘るのが良いのですが」と、孝さんは汗びっしょりになって、奥さんの美雪さん(39)と息を合わせてタワシを動かす。

覚えた技は120種 編み組みの巨匠・西園さん

宮之城町の竹細工のもう一つは、編み組みである。

昭和39年から34年間、メーカーの依頼でランプシェードを作り続けてきた西園親之さん(65)は、昨年から不景気の煽りを受けて、めっきり注文が減った。

19歳の時に身体を壊して、力仕事ができなくなった西園さんが、竹細工をしたいと父親に告げると、猛反対されたが、あきらめなかった。最初に弟子に入った昭和28年、月給が600円。自分用の鉈を買ったら600円で、その月は月給ゼロだった。

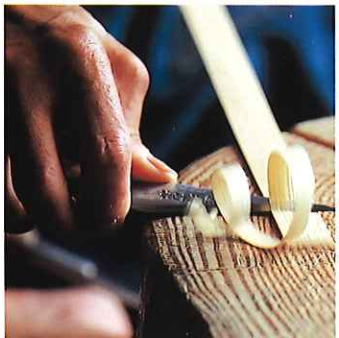
「好きでないと、出来ない仕事ですよね」

一人立ちした昭和30年代前半は、ピクニックバスケットや果物カゴなどの輸出品で景気は良かった。しかし、昭和35年にぴたりと注文が止まった。仕事のないこの時期に、日奈久、八女、日田、湯布院などを廻り、他の職人の仕事を研究した。人間国宝庄野松雲斎の作品を見た時の衝撃を忘れられない。

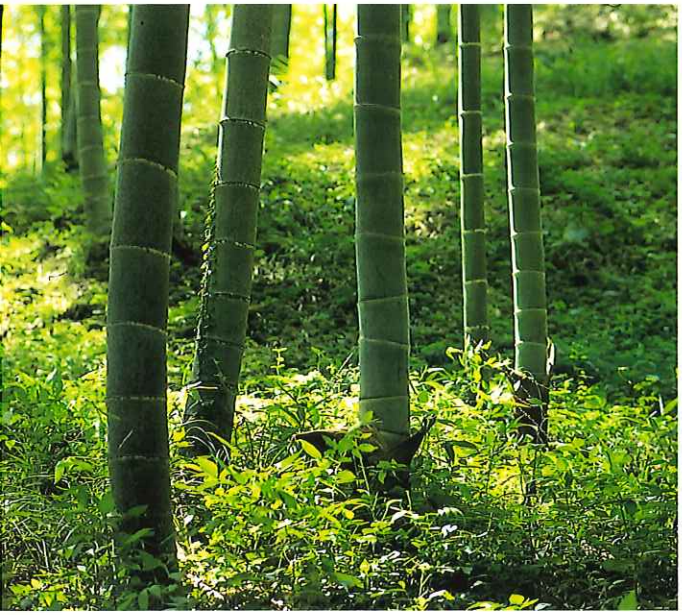
「節を付けたまま、果物カゴを作っていたんですよ。その荒々しい美しさに驚きました」

一時期は、職人を4人も雇うほどだったランプシェードの仕事が無くなった今、他の人に出来ないものを作ってみたいと、新たな意欲が湧いている。

「誰もやったことのない物を作る時には、家族が寝静まった音のしない時じゃないと集中できない。11月に宮之城町で開催される全国竹の大会には、サッカーボールをイメージした



120種の竹細工をする西園さんの鮮やかな手さばきと作品。



▲竹細工教室で町民が作った作品。

▼園芸用竹製品も展示する竹松公園。

ランプシェードを出品するつもりです。どういう時代になろうが、私は竹で生きるんだという信念を持っていますから」

西園さんは、これまでに覚えた技の見本を見せてくれた。編み方は、網代、菊底、ゴザ目編みなど120種。止め方が、巻き縁、当て縁、共縁など20種。巻き方は23種。

「34歳になる息子は神戸で結婚したから、もう帰ってこないんですよ。後継者がほしいんだけどね」

貧しさに耐え、苦労して受け継ぎ、工夫した伝統工芸の技を守る後継者は、宮之城町に今のところ居ない。

竹細工教室、竹取通り等…竹を町づくりの活力に

伝統工芸の底辺を広げようと、総工費2億6200万円をかけて昭和61年8月に落成した「宮之城伝統工芸センター」では、6クラスで毎月2回の竹細工教室を開いている。近隣の市町村や熊本県、宮崎県からの参加者もあって、今年は121人が受講している。

伝統工芸センターではこの他に、孟宗竹を半分に割って平らに延ばし、机や下駄など平板による生活用品の開発を進め、今秋には商品化を目指している。

尾形誠亮館長(64)は、

「竹は5年で使えるし、切っていかなければ増えていかない。環境の問題を考えても、今後は木に代って竹の需要が出てくるはず」

▼竹を街路樹にした「竹取通り」

と、期待を膨らませている。

宮之城町内を歩くと、街路樹の代りに竹を植えるなど、積極的に竹をアピールしていこうとする意欲が伝わってくる。旧国鉄宮之城駅の周辺に誕生したシンボルロード「竹取通り」もその一つだ。歩道に竹を植え、街灯も竹をイメージしたデザインでモダンな一角になっている。

チクリン村の二代目村長此元正明さん(43)は、「所期の目的は果たしたのではないか」と、次の課題に意欲をみせている。

「チクリン村の活動をするまでは、竹を意識したことはなかった。今では竹の良さを町の皆が知ったと思う。以前は、物産や観光を議題に一生懸命やってきたが、少しは豊かになったのだろうか。家では嫁さんが親の看護をしていた現実を、見ないふりをしていなかったか。田舎でさえ、きれいな川がなくなっている。本当の町おこしはこれからです」

チクリン村の議題にも、環境、教育、福祉などが多くなった。外に向けていたエネルギーが、足元を固めようという意識に変ってきているのである。

此元村長は「みやんじょチクリン村」の活動の中で最も感動するのは、「お月見コンサート」で地元の小中学生が一緒になって合同吹奏楽団員として演奏する時だ。

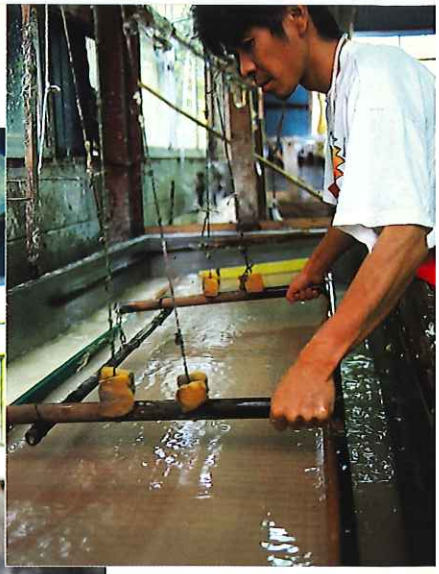
地元を愛する気持ちを育めば、宮之城町の風土が育てた伝統工芸竹細工も、愛され受け継がれていくはずである。

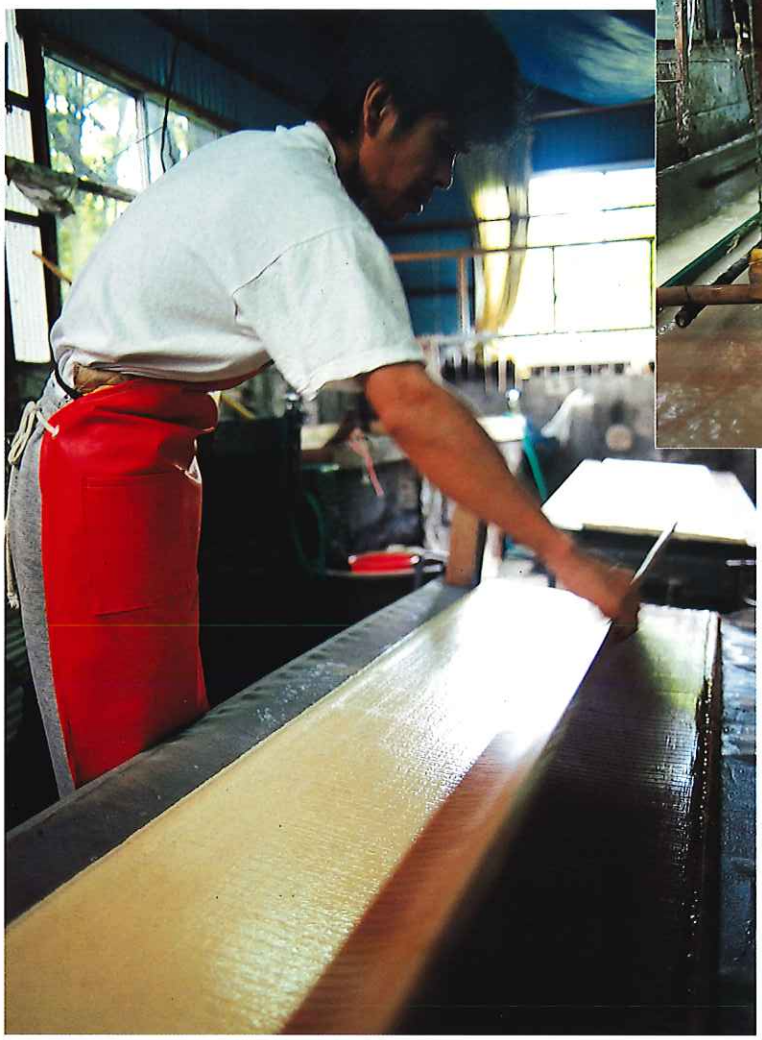
●伝統工芸センター／鹿児島県宮之城町虎居
☎0996(52)1313

文・写真／芥川　仁

伝統の技を守りつつ、新しい魅力づくりに意欲的

佐治因州和紙（鳥取県佐治村）





▶特大の和紙を手すきする前田修一朗さん

墨の吸い方、かすれ方、にじみ方などが良いと、書道家達に愛用されている佐治因州和紙。

因州和紙の起源は古く、平安時代の「延喜式」にもその名が記され、佐治は中世の頃より三椏（みつまた）を材料とした極上紙「因州筆切れず紙」の産地として全国へ知られるようになった。戦後は機械漉き洋紙の台頭や需要の変化等で何度となく危機を迎えながらも、我慢強く研究熱心な職人達の努力が続いている。

佐治川の清流にそって——

佐治村は「佐治七里」「佐治谷」といわれるように、東西に細長い村で、村の中央を佐治川の清流が流れている。島根の大山、蒜山（ひるぜん）高原を経て国道482号を佐治村へ向ったが、村へ入る峠にはブナの美しい原生林があった。深い山から流れ出てきた豊かな清流が佐治の和紙産業を支えてきたのだろう。

谷間の傾面に点在する集落を経ておよそ3里ほど下流へ向うと、道の周辺には広々とした平地が広がり、人家の多い村の中心部に至り、佐治川に面して役場があった。

コンクリートの荒々しさを造形的に取り入れたユニークな建物で、中庭には「日本三大名石地・佐治」にふさわしく、佐治産の銘石を配した庭園がある。野外劇場を思わせるような不思議な空間である。

役場の一角に、お年寄りや住民が気軽に休憩したり会合できる和室や、お母さん達の経営する食堂「ぽんぽこ亭」、さらに隣接して中央公民館があり、暖かい雰囲気にあふれている。

経済課伊縫憲男課長からお話を伺った。

「佐治は農地が少ないので、昔から和紙をはじめ、漆、ろう、麻などを生産加工する職人たちの里でした。和紙づくりに必要な三椏等も昔は地元産を使い極上品を作ってきましたが、いまは画仙紙が中心で、材料は大半を中国などから輸入しています。家族で細々と経営している和紙工房がほとんどですが、23戸がそれぞれ工夫して特

▼杉皮を使った和紙開発をする前田茂徳さんと和紙見本

◀「かみんぐさじ」で人気のレターセット、葉書など。

色ある和紙を作っています。ワラ、竹、葦など、繊維として使えるものは何でも挑戦してみる。佐治の人間は粘り強く、どんな苦労も厭わないんです」

全国でも23戸の和紙工房を持つ町村は佐治だけ。全国和紙連合会主催の会合も佐治村が主体で行ったりしている。

漉き手は長男、父親は新製品の開発に 前田さん「尚玄」工房

前田茂徳さん(50)経営の「尚玄」は古い和紙業家。従業員8人が働いており、書道家や画家等が愛用する和紙を、従来の伝統的手法で生産している。

五代目を担う長男の前田修一朗さん(35)が現場の要となり、書画家が展覧会等で大作用に使う特大の和紙づくりを手がけている。7尺5寸×1尺5寸というもので、紙の厚さも2、3㎜ある。

7種以上の原料を配しているという漉き糟に簀桁(すけた)をくぐらせ、ゆらす。ロウ色のこってりした液だ。簀桁に現われる繊維の微妙な表情を見るために、蛍光燈はさけて、直射日光の当たらない窓辺の自然光の中で作業する。均等に分散されているのを素早く確めると、畳一枚もあるような簀桁をすくい上げ、後に身体の向きを変えて、ゆっくり、息をひそめるように簀桁から和紙をはずしていく。

大変な重労働と熟練した技が必要である。

修一朗さんは鳥取県の工業試験所紙業科で和紙づくりの専門知識をみっちり学んだあと24歳の時に戻って家業を手伝っている。

「もう私は肉体的にもきつくて小物しか漉きません」という茂徳社長は、注文に応じた原料の調合の他、新製品の開発などに意欲を燃やしている。

同社が手がけている和紙は、天蚕紙、大麻紙、純三椏紙、純楮紙、杉皮紙、画仙紙など約10種類。しょうがの茎、竹皮などいろいろなものを混ぜる。

「土にはえているものならみな和紙になります」という社長が、いま開発中のものは、杉の皮を利用した和紙。木材生産で有名な智頭町へ生き、廃材となった杉の皮をもらい、それを2日間水や薬品につけてヤニ成分をとる。繊維が大変しっかりしているので、丸棒で叩くという原始的な方法で細かくし、三椏等少し加えて手漉きする。

杉の色合いと繊維質な肌ざわりがあり、ランチョンマットや壁紙などにぜひ使ってみたいと思った。

従業員はみな地元の人達で、この道何十年というベテランだが、高齢化が進んでいる。

手すき和紙製造を機械化した自動省力化システム。下は乾燥作業。

「若い人も和紙に憧れて見習いに来ますが、立ちっぱなしでやる力仕事だから長続きせんのよ」と言う女性、65歳だが慣れた物腰でスピーディに画仙紙の手漉きを行なっている。

魅力的な修一朗さんはまだ独身、誰かいい女性が現われて欲しい。

自動省力化システムを導入 和紙の体験コーナーも

役場からほど近い場所に平成7年11月にオープンしたのが和紙生産伝習施設「かみんぐさじ」。佐治の地場産業である手すき和紙の振興をはかり、文化と伝統にふれあう場として総工費2億4000万円かけて建設、運営は第三セクター㈲かみんぐさじ。

社長の岡村喬さん(68)は鳥取県因州和紙振興会会長や佐治村商工会長などを務める人で、

夢を語る岡村喬社長

和紙で作ったお面

同施設開設に当たっては、全国でもはじめて手すき和紙の自動省力化システムを導入した。昔ながらの紙漉きと脱水作業を自動で行うことができ、人手は原料のセッティングと乾燥作業だけ。メーカーと共に3年がかりで開発した最新鋭で従来の手すきと遜色ない画仙紙が次々と作られていく。

一階の和紙展示コーナーでは、因州和紙をはじめ、全国の和紙や千代紙等も販売、和紙の魅力を知ってもらうためにおしゃれなレターセット、押葉や草木入り和紙、和紙を使った版画や絵画なども扱っている。各地から見学に訪れて、観光名所になっている。

岡村社長は和紙の魅力と特性を活かしたいと3年前にセラミックス入り和紙を開発した。用瀬町のメーカーと共同開発したもので、抗菌性、防臭性に優れ、桃の包装に最も適していることがわかった。他の果物や食品にも利用できると、実用化に向けて積極的に取り組んでいる。

事務所には和紙を貼り合わせて作ったというお面類があった。「和紙は丈夫で反永久的に使えます。知り合いの画家に木型を作ってもらいました。これに和紙を重ねて貼っていき絵付けすれば、お好みの面が出来上がります。本当は『佐治谷話(たに)』の主人公の面を作りたいんです」と少年のように目を輝かす。

「佐治谷話」というのは村内に伝わる愚か者の話で、佐治は日本三大愚か話の産地の一つとか。山里の人が街へ出ていって失敗などしたユーモラスな話が多く、古典落語の原点ともいうべき民話。多少名の知れた漫画家などが「佐治話」にふさわしいキャラクターを作ってくれれば、佐治が〝民話の里〟としても知名度を高めていくに違いない。

なお「かみんぐさじ」では一階展示コーナー奥に、手すき和紙の体験教室を設けて、折にふれ見学者や子供達に和紙づくりに参加してもらい、和紙の魅力を感じてもらうようにしている。

長期間研修する学生などもおり、その中から手すき和紙職人をめざす若者が現われることを岡村社長は期待している。

子供達も和紙に親しみながら

和紙は佐治の子供達にとっては身近かな存在。午後二、三時になると学校帰りの小学生たちが商工会館二階の書道教室に次々とやってくる。指導に当たる先生は以前、佐治小学校で教頭をしていた書家。以来10数年間近くの町より週2回教えに来ている。

「ここの子供達はさすが和紙の里にふさわしく、書道に熱心で、全国的にもレベルが高いですよ。正しい姿勢できちんと文字を書くことを小学生の時にぜひ身につけて欲しい」と語っていた。

佐治小学校では、卒業証書も子供達が体験教室で作った自作の手すき和紙。もう11年間も続けられ、父兄にも喜ばれている。

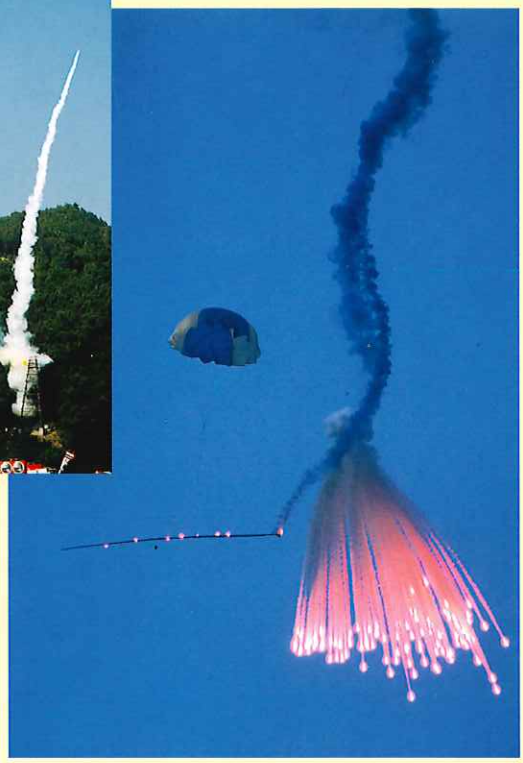
●かみんぐさじ／鳥取県佐治村福岡
☎0858(89)1816(水曜日休館)

●佐治村役場 ☎0858(88)0211

文／浅井登美子　写真／小林　恵

◀小学生のほとんどが書道教室に参加、地元産の画仙紙をたっぷり使って――。

氏子達が手作りして奉納
椋神社 竜勢煙火
（埼玉県吉田町）


吉田町「竜勢煙火」

花火は日本を代表する伝統行事であり、花火師の技術は世界一を誇っている。全国に花火製造を職業とする人（企業）は多いが、普段は農業、サラリーマン等をしながら、年一回秋の祭りに向けて花火を作り、地域の神社へ奉納している集団がある。

埼玉県西秩父の吉田町、長野県南信州の清内路村がそれ。準備は9月からはじまり、夜や休日に集って作業にとりかかり、10月の秋の例祭に打上げられる。共に古い歴史を持ち時代を経ながらも中止されることなく続けられてきた。求められる高度な技術、一つ間違えば命の危険も伴う作業。だからこそ地域の人が結束し、若い人が年輩者からさまざまな技術や知恵を学ぶ機会でもあった。

吉田町では椋神社の秋祭りに「竜勢」を打上げる。これは、松材の芯をくりぬいて、中に火薬をつめ、長さ14～15mもある青竹に括りつけ、高さ25m程の櫓に取り付けて点火するもので、櫓を離れた花火は、火煙を噴射しながら轟音と共に白い煙を引いて天高く舞い上がる。その様子が竜の姿に似ていることから「竜勢」またはロケット煙火と呼ばれるようになった。

竜勢は戦国の頃に狼火（のろし）として農民が考案したものを、永正年間に吉田町に居を構えた栗原宮内左衛門が工夫したとか、竜泉寺の住職が天保8年に考案した等、各説があるが、現代になっては明治24年に椋神社の石段改修を祝って秋の祭礼に奉納されたのがはじまりだという。

竜勢作りは、まず火薬を詰める筒作りから。木に粘りがありひびのない（節がない）松材を使う。玉切りにした松の皮をはぎ、二つ割して内側をくりぬく。二つを元のように合わせて筒にし、筒の両端に乾燥させた粘土を入れ、火薬を詰める。

筒作りと並行して竜勢の背負物（しょいもの）作りも進められる。

これは竜勢が空中高く上った時、落下傘が開くように沢山の傘が群舞したり、たれ幕が出たりする余興で、各流派が競って工夫するようになった。落下傘は和紙を貼り合せて作り、直径5m以上もある。それにカツ糸を張りめぐらし、さらに和紙で糊付けする。

火薬は、昭和30年半ばから、法の規制により皆野町の煙火店の作業工場で資格を持つ人が行う。木炭、硝石、硫黄を混ぜ合せて作るが、調合の仕方は各流派の秘伝になっている。出来上った火薬には「しとり」といって水、お茶、酒などを吹きかけて湿り気を持たせ、打ち上げ前日まで煙火店で保管する。

筒は地面の深さ50～60cmの穴に入れ、粘土、火薬を入れる。この作業をくり返し、内径三寸の筒に約3・5kgの火薬が入る。これを祭り前日の午前一時頃祭り広場へ運び、筒を取り付け、導火線を結ぶ。

8月の氏子総代会から祭礼当日まで約二カ月、その間竜勢作りに一カ月。当日は多くの観客が見守る中を、若衆が練りながら竜勢置場から打上げ櫓まで運ぶ。「トザイ、トウザイ…」で流派や玉名を述べる口上が神社と煙火櫓の上二カ所で行われると、やがてシュルシュルと導火線を火が伝っていき、すさまじい唸り音と共に噴射、竜勢は10数mの空へ舞い上っていく。現在約10の流派があり30個が打上げられる。

●吉田町役場　☎0494(77)1111

清内路村（長野県）の花火は98年長野オリンピックの閉会式を飾ったことで有名。上清内路、下清内路の二つの保存会があり、毎年10月上旬にそれぞれの神社に奉納される。江戸時代に三河地方を訪れた村民が持参した煙草と引換えに、秘法を伝授してきたもので享保16年に諏訪神社の再建に奉納して以来、戦中戦後も途絶えることなく続けられている。長野県無形民俗文化財。

●清内路村役場　☎0265(46)2001

清内路村「仕掛け花火」

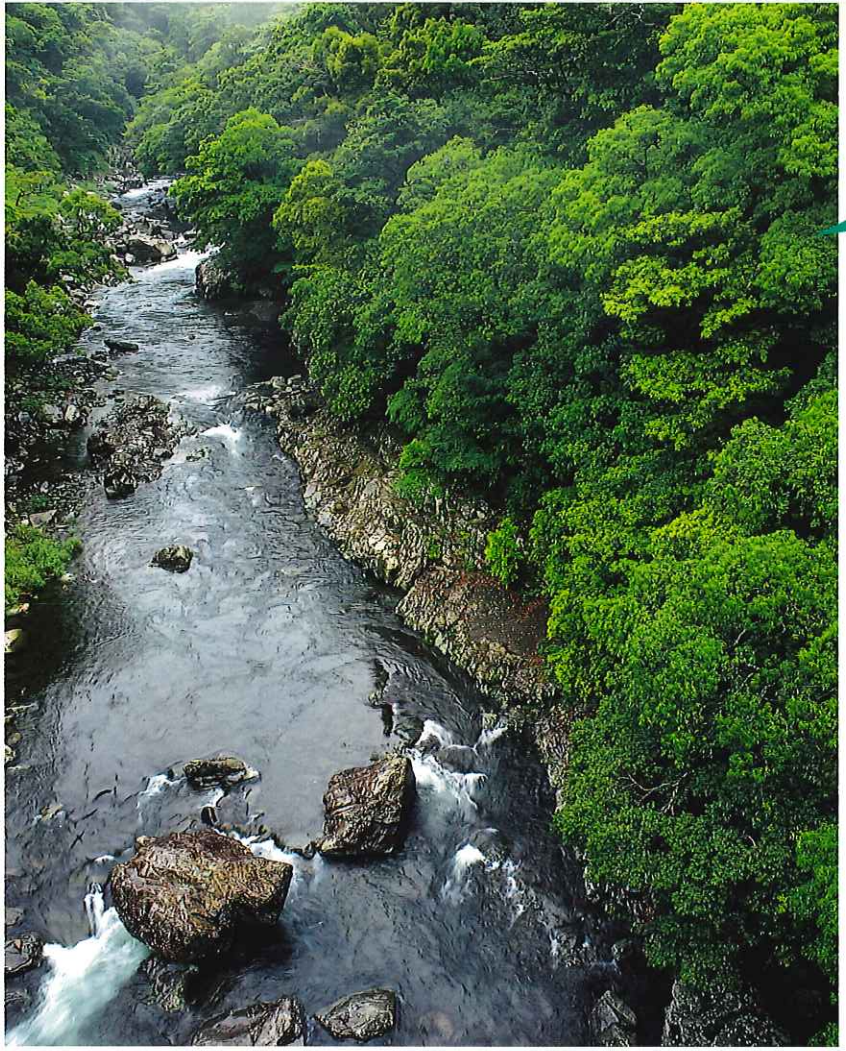
過疎のむらから地球が見える❷

地球環境にやさしく自然と共生するまちへ。失われた自然の再生、森や河川、大地の保全等を通じて、〝心の豊かさ〟も耕していく。そんな活動をシリーズで紹介。

豊かな森と川と大地を―「自然生態系農業」のまち

宮崎県綾町

文・写真／芥川　仁



綾南川渓谷の照葉樹林

町長自ら照葉樹林の伐採中止を求めて

霧雨の煙る綾南川の深い谷に沿って、約3000haと我が国で最も広い照葉樹林帯が広がっている。モコモコと樹木一本一本が盛り上り、深い緑色の綿菓子が重なったように見える。森の中に入ると、生い茂った厚い葉が太陽を遮り、ひんやりと湿った空気が漂う。

宮崎県綾町は、人口約7400人、昭和63年に全国で初めて「自然生態系農業の推進に関する条例」を制定し、有機農業による町おこしを実践している。その根幹が、照葉樹林帯なのである。

かつては林業が主体で、照葉樹林から伐り出される樹齢数百年というカヤの木を使った碁盤が、地場産業の目玉であった。人口は減少し、目立った産業もない昭和42年、町長に就任したばかりだった郷田実氏(当時48)に、林野庁から綾南川の水を育む照葉樹林帯を伐採すると通知があった。

綾町役場の黒木政則企画広報係長(43)の話によると、「郷田町長は、木を伐ると川がだめになる、と直感的に思われたようです」。

綾町で生まれ育った者ならば誰にとっても、綾北川と綾南川の清流、それと黄金の鮎が誇りである。照葉樹林を伐採すれば、町の誇りを奪われると、県知事、県議会、熊本営林署に伐採中止の陳情を、郷田町長を先頭に、町民や町議会をあげて行なった。しかし、「直感」では説得力がない。郷田町長は「自然とは何か」について猛勉強を始めた。この時「照葉樹林文化」という言葉に出会い、「自然生態系農業」の考え方を知った。

健康で住みよい町に家庭菜園運動

自然のサイクルを利用するのが本当の農業なのだと、昭和48年に始めたのが「健康で住みよい町づくり」をスローガンにした家庭菜園運動である。「畑の片隅、自宅の庭で作ってください」と野菜の種を大量に町民に配布し、土づくりによる有機農業を実践した。家庭菜園でも家族では食べられないほどの野菜が出来る。余った野菜をそのまま捨てるのではもったいない。週一回、農協前広場で「青空市場」を開いた。町民向けに並べた野菜を、20キロも離れた宮崎市からわざわざ買いに来る人々がいた。ちょうど「複合汚染」が話題になっていた。林業では展望がない。農業で食っていこうとするならば、他所とは違ったことをしなくてはいけない。

生ゴミの収集風景

生ゴミを有機肥料に

綾町が有機農業に本格的に取り組んだのは昭和53年。最初、し尿を液状堆肥化する自給肥料供給施設をつくった。昭和56年には家畜糞尿処理施設、昭和62年に生ゴミを有機肥料として活用する家庭雑廃コンポスト施設を建設した。

「福祉の集まりだろうが、学校の集まりだろうが、うちの町長は有機農業の話をする」と。町民が呆れたのもこの頃である。郷田実町長は、平成2年まで6期を務めて、自然生態系農業の体制を作り上げた。今、アンケートで「町の誇りは何ですか」と問うと、「川」と答える町民が多い。子供の頃、釣りに行ったり、泳いだりした思い出と、毎日のように食卓に上った鮎に対する思い入れは深い。自然生態系農業を進める運動は、この川を守る運動でもあった。

人影も車もまだ朝もやの中でぼんやりとしている午前6時過ぎ、「お願いしまーす」と声を掛けて、生ゴミをトラックのポリタンクに投げ入れる婦人、次の角にはステテコ姿の男性。綾町の生ゴミ収集トラックは、日曜日を除く毎朝、町内60%の家庭を回ってゆっくりと走る。一日3tの生ゴミが出る。残り40%の家庭には、家庭用コンポストで畑に帰してもらう。生ゴミは、100%土に還元している。昭和62年から始めた生ゴミの堆肥化。それまで、養豚業者が餌として集めていた生ゴミを、餌に使わなくなって処置にこまった末の策だ。農家からトン当り4000円で買った牛フンと同量混ぜると、良質の堆肥ができた。これを、10キロ袋詰めで200円、バラ売り1トンを6000円で町民に販売する。

生ゴミの異臭が堆肥工場の周辺住民から出ていたため、昨年からは密閉式ロックウール脱臭施設を運転。電気料だけで月20万円の維持費がかかり、堆肥工場は赤字だが、有機農業を推進するための経費と考えている。

農家の努力と工夫で

綾町農協は合併を断り、一町一農協で、町と一体になって自然生態系農業を推進してきた。これまで曖昧だった有機農業を、土づくりと肥料の使い方で三つのランクに分け、生産物にランク別認証を張って認定するのは、町の役割。畑ごとの肥料設計や有機農産物の販売は、農協の担当である。綾町農協の一昨年の総販売高は、34億5700万円、そのうち有機農産物が7億7000万円。この比率は、年々10%近く増えている。

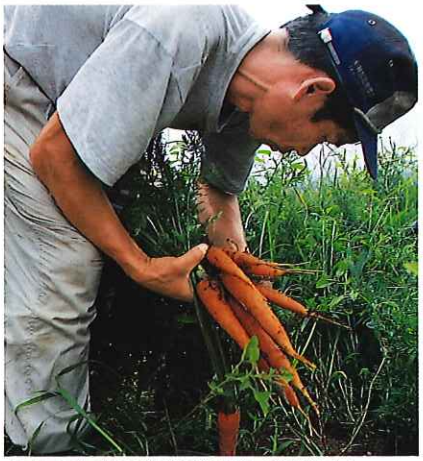
綾町農協とゴボウの契約栽培をしている市来了さん(63)は、生産物の95%を農協へ出荷する。

ピーマンの有機農業をする森久保正廣さん

「有機栽培は、天候の変動などでリスクが大きいので、契約栽培が一番安全なんです。土づくりができていれば、虫はつかんですわ。農薬による土壌消毒ができないから、ネマキングという薬草を畑につくって、それを鋤込んで根瘤センチュウを退治します」

有機農業は個人の努力と工夫に依るところが大きい。水の里綾有機施設胡瓜研究会の森久保正廣さん(49)は、「有機農業はいかに良い水とつき合うかです」と、不可能といわれるハウス胡瓜の有機栽培に取り組んでいる。苗を植える前の1カ月間、畑に水を貯めて放置する。こうすると酸素不足で病原虫が死に、微生物は残る。稲の作り方と同じ原理だ。ハウス胡瓜の無農薬栽培は難しいので、残留性の弱い農薬を標準の半分使う減農薬だ。綾町の有機農産物区分のCに当たる。

「どこを掘っても、5mで良い水が出てくる。この水の他に、生物活性水や酸化電位水など、農薬を使わない替わりになる水の研究をしています。しかし、手間はかかる、収量は落ちる。100軒あるハウス農家のうち22人だけですよ、有機、減農薬でやる意欲があるのは」。


ハウスで無農薬栽培に挑む山口今朝廣さん

森久保さんがハウス胡瓜を始めて12年。食べるだけの生活だった年も多い。

「こだわりを捨てたら駄目。駄目でも有機にこだわってやると、いつか軌道にのる」。

有機栽培、完全無農薬で16年間、農協には出荷せず、産直を続けてきた山口今朝廣さん(46)も、一旦後もどりすれば先には進めないと、自らを励ます。

「昨年は、トマト400本が疫病で全滅しました。そんな時でも、一旦農薬を使ってしまえば、先には行けない。色々な作物を作ってリスクを減らし、不作を豊作で補う。60%出来ればいいんです」。

綾町で「自然生態系農業の推進に関する条例」が制定されて10年。美しい森とおいしい水のイメージは定着した。酒のテーマパーク「酒泉の杜(もり)」が人気を呼び、綾町を訪れる観光客は年間110万人と数年で急増している。綾町では、矛盾しそうな農業と観光が、「自然生態系を生かす」という理念で見事に結び付き、相乗効果を上げている。

市来了さん・サチ子さん夫妻

INFORMATION 各地の伝統工芸品

機織り教室に参加しませんか！

●会津郷からむし織り

（福島県昭和村）

平安時代の中期に、中国より奈良を経て会津の昭和村に運ばれたのが始まりといわれ、からむしの栽培は会津藩の奨励事業として大々的に行われ、越後上布の原料として供給された。栽培、加工は地域の産業として定着し、農家の女性たちは農閑期を利用してからむし織りを行ってきた。

しかし戦後になると、化学繊維の普及等で栽培や織物づくりが次第に衰退していった。伝統技術地場産業が消えていくことを危惧した住民や村の関係者により、昭和48年に村の農協に生産部を設け、栽培を復活、お年寄りから若い人へ糸づくり、織りを伝承している。自然の風合いを持つ紬感覚の布は「会津上布」として珍重される一方、ハンドバッグ、ネクタイ、帯、財布等の小物類が多数作られ、人気がある。

「からむし織り教室」、体験フェア、展示即売会も開かれており、教室は都市の女性にも人気がある。

昭和村農協工芸課
☎0241(57)2204

ほのぼのと手の温もり

●「猫つぐら」

（長野県栄村）

一本一本ワラを丁寧に編み込んだワラ細工。蓑、ワラ靴、餅や御飯入れなど、寒い地方の欠かせない生活用具として、農家のお年寄りが伝承してきたが、近頃は縄を編める農家の人もめっきり少なくなった。

そんな中で郷土工芸品としていま人気があるのが「猫つぐら」という猫の家。質のいいワラをたたいてほぐして数本づつをしっかり編み込む。ほのぼのとしたやさしさ、温もりに猫は大満足、少々ツメを出したり噛んだりしても大丈夫。以前は農閑期の仕事として作られていたが、最近は需要が増えてきたため、年間を通じて製作されている。

秋山郷には雪深い里ならではの伝統工芸品が多く、代表的なのがトチの木を手彫りで削った「秋山木鉢」。また、地元産のコウゾを原料にした「内山和紙」は国の伝統工芸品に指定されている。雪にさらした白くて強靭、通風性と通光性に優れた和紙で、民芸品に使われている。

栄村振興公社
☎0269(87)3115
秋山郷観光協会
☎0257(67)2202

▲▶猫つぐら
▼内山和紙

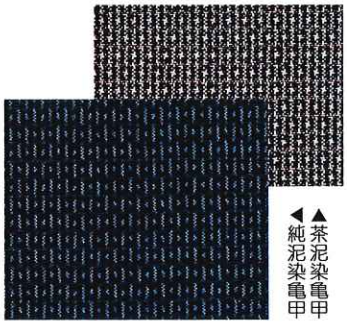
紬を代表する「大島紬」男のステイタスとして

（鹿児島県笠利町）

奄美大島大島紬はわが国の染色織物のなかで最も古い伝統を受け継いでおり、通産大臣指定の伝統的工芸品になっている。30数工程にもおよぶ気も遠くなるような緻密な手作業によって織り上げられる絹織物の頂点。染めと織りの美しさから女性の憧れの着物として人気があるが、和服離れから需要は減りつつあり、職人も高齢化している。

しかし変わらぬ人気を誇っているのが、亀甲柄の泥染。藍色、草木染め亀甲柄は男もの着物として、あるいは夫婦ペア用として需要が延びている。本物は変わらぬ美しさと風情があり、着心地がいい。男のステイタスとしてさらに普及したいと組合では語っている。本場大島紬の製造工程を見学できる「紬の館」もあり、織りを体験する女性たちが増えてきた。

本場大島紬協同組合
☎0997(63)0349



▲茶泥染亀甲
◀純泥染亀甲

日本六大古窯のふる里

●越前陶芸村

（福井県宮崎村）

越前焼は、瀬戸、常滑、信楽、丹波、備前と並ぶ日本六大古窯の一つで、平安時代から陶芸が行われており、現在200基の古窯が発見されている。当時すでに壺、瓶すり鉢、舟徳利等が焼かれており、日本人の先祖達の豊かな暮らしがしのばれる。

昭和46年に誕生した「越前陶芸村」は整備が進み、クラフトパークの中に「福井県陶芸館」越前焼窯元村、陶芸公園、国指定重要文化財「相ノ本邸」、宿泊もできる民家「樹香苑」、組合の陶芸直売所、陶芸村文化交流会館（セラミックアートセンター）などがある。陶芸館では一人でも参加できる陶芸教室を開いており、女性達に人気がある。

宮崎村役場商工観光課
☎0778(32)3466
福井県陶芸館
☎0778(32)2174

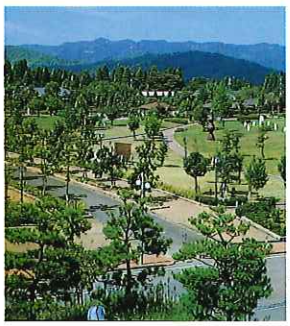
400年の陶郷

●波佐見（長崎県波佐見町）

町の谷あり、陶郷中尾山には大規模な登り窯が築かれ、工房がぎっしり軒を連ねている。大村落の御用窯として400年の歴史を持つ、肥前焼きの元祖で世界最大級の登り窯跡もある。

陶芸を志す若者も全国から来ており、伝習館でろくろ体験ができる。（☎0956・85・6127）

山を一つ隔てると三川内陶郷もあり、共に伝統的肥前焼と作家達の新作にふれることができる。



◀陶芸公園

お知らせ

■全国過疎問題シンポジウム
（岡山県倉敷市・高梁市）

■テーマ

「21世紀に挑戦する過疎地域」

新しいライフスタイルに対応した地域の活性化

■日程と主な内容

●11月10日(火)　基調講演

宮口侗廸（早稲田大学教育学部教授）

●11月11日(水)

・第1分科会（倉敷市民会館）
成功事例に見る地域活性化の秘訣

・第2分科会（倉敷公民館大ホール）
過疎地域の新たなライフスタイルを求めて

・第3分科会（倉敷市立美術館講堂）
情報化が開く過疎地域の新たな可能性

・第4分科会（高梁市文化交流館中ホール）
明るく・楽しく・安心できる長寿社会の創造に向けて

編集後記

■取材を通して、日本にはモノ作りに関する沢山の言葉や文字があることを再発見した。伝統工芸品と共に、これらの言葉もしっかり伝承していかなければならないと痛感する。

■約200種に及ぶ通産省指定の伝統的工芸品、県や市町村指定を加えると500種近くあると思われる。今回は、誌面の都合で、日本を代表する陶磁器や紬等の繊維製品は取り上げなかった。次の機会にまた特集を組みたい。(A)

De POLA NO.15

［でぽら］'98 秋冬号

発行日／平成10年9月15日

発行所／全国過疎地域活性化連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル8階
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

編集協力・印刷／株式会社 ぎょうせい

協力／編集工房アド・エー／地域活性化センター

通商産業省指定［伝統的工芸品］一覧

地区	都道府県別	指定品目	品目名
東北（計19）	青森	1	津軽塗
	岩手	4	南部鉄器　岩谷堂箪笥　秀衡塗　浄法寺塗
	宮城	3	宮城伝統こけし　雄勝硯　鳴子漆器
	秋田	4	樺細工　川連漆器　大館曲げわっぱ　秋田杉桶樽
	山形	4	山形鋳物　置賜紬　山形仏壇　天童将棋駒
	福島	3	会津塗　大堀相馬焼　会津本郷焼
関東（計44）	茨城	3	結城紬　笠間焼　真壁石燈籠
	栃木	2(1)	結城紬　益子焼
	群馬	2	伊勢崎絣　桐生織
	埼玉	2	江戸木目込人形　春日部桐箪笥
	東京	9(1)	村山大島紬　東京染小紋　本場黄八丈　江戸木目込人形　東京銀器 東京手描友禅　多摩織　江戸和竿　江戸指物
	神奈川	3	鎌倉彫　箱根寄木細工　小田原漆器
	新潟	13	塩沢紬　小千谷縮　小千谷紬　村上木彫堆朱　本塩沢　加茂桐箪笥 新潟・白根仏壇　長岡仏壇　三条仏壇　燕鎚起銅器　十日町絣 十日町明石ちぢみ　越後与板打刃物
	山梨	2	甲州水晶貴石細工　甲州印伝
	長野	7	信州紬　木曽漆器　飯山仏壇　松本家具　内山紙 南木曽ろくろ細工　信州打刃物
	静岡	3	駿河竹千筋細工　駿河雛具　駿河雛人形
中部（計37）	富山	5	高岡銅器　井波彫刻　高岡漆器　越中和紙　庄川挽物木地
	石川	10	加賀友禅　九谷焼　輪島塗　山中漆器　金沢仏壇　七尾仏壇 金沢漆器　牛首紬　加賀繍　金沢箔
	岐阜	5	飛騨春慶　一位一刀彫　美濃焼　美濃和紙　岐阜提灯
	愛知	12	有松・鳴海絞　常滑焼　名古屋仏壇　三河仏壇　豊橋筆　赤津焼 岡崎石工品　名古屋桐箪笥　名古屋友禅　名古屋黒紋付染 尾張七宝　瀬戸染付焼
	三重	5	伊賀くみひも　四日市萬古焼　鈴鹿墨　伊賀焼　伊勢形紙
近畿（計43）	福井	6	越前漆器　越前和紙　若狭めのう細工　若狭塗　越前打刃物　越前焼
	滋賀	3	彦根仏壇　信楽焼　近江上布
	京都	17	西陣織　京鹿の子絞　京仏壇　京仏具　京漆器　京友禅　京小紋 京指物　京繍　京くみひも　京焼・清水焼　京扇子　京うちわ 京黒紋付染　京石工芸品　京人形　京表具
	大阪	7	大阪欄間　大阪唐木指物　堺打刃物　大阪仏壇　大阪浪華錫器 大阪泉州桐箪笥　大阪金剛簾
	兵庫	6	播州そろばん　丹波立杭焼　出石焼　播州毛鉤　豊岡杞柳細工 播州三木打刃物
	奈良	2	高山茶筌　奈良筆
	和歌山	2	紀州漆器　紀州箪笥
中国（計14）	鳥取	3(1)	因州和紙　弓浜絣　出雲石灯ろう
	島根	4	出雲石灯ろう　雲州そろばん　石州和紙　石見焼
	岡山	2	勝山竹細工　備前焼
	広島	4	熊野筆　広島仏壇　宮島細工　福山琴
	山口	2	赤間硯　大内塗
四国（計8）	徳島	2	阿波和紙　阿波正藍しじら織
	香川	2	香川漆器　丸亀うちわ
	愛媛	2	砥部焼　大洲和紙
	高知	2	土佐和紙　土佐打刃物
九州（計14）	福岡	6	小石原焼　博多人形　博多織　久留米絣　八女福島仏壇　上野焼
	佐賀	2	伊万里・有田焼　唐津焼
	長崎	2	三川内焼　波佐見焼
	大分	1	別府竹細工
	宮崎	2(1)	本場大島紬　都城大弓
	鹿児島	2	本場大島紬　川辺仏壇
沖縄（計13）	沖縄	13	久米島紬　宮古上布　読谷山花織　読谷山ミンサー　壺屋焼 琉球絣　首里織　琉球びんがた　琉球漆器　与那国織 喜如嘉の芭蕉布　八重山ミンサー　八重山上布
合計		192	業種別内訳：繊維製品 47（織物 32、染色品 11、その他の繊維製品 4）、陶磁器 26、漆器 22、木・竹工品 27、金工品 12、仏壇・仏具 16、和紙 9、その他 30（文具 8、人形 6、石工品 4、貴石細工 2、その他工芸品10）、工芸用具 1、工芸材料 2

指定品目数の（　）内の数字は、指定が他の都府県と重複する内数を現わしている。
平成10年6月現在　提供：通商産業省生活産業局伝統的工芸品産業室

De POLA [でぽら] NO.15
平成10年9月15日発行
発行／全国過疎地域活性化連盟 〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24 オカモトヤビル8階 ☎03(3580)3070代

財団法人 日本宝くじ協会
宝くじのホームページ
http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp

いい夢、咲かそ。

●本誌は財団法人日本宝くじ協会の
助成を受けて作成されたものです。

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、
公共事業に役立っています。
宝くじ